

平成 20 年度

# 都 倫 研 紀 要

第 47 集

## 都倫研紀要第47集を刊行するにあたって

会長 立石 武 則（東京都立若葉総合高等学校長）

この度、「都倫研紀要第47集」を刊行するに当たり、原稿をお寄せいただいた皆様、また、刊行に向けて編集等の労をお取りいただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

私たち教員は、常々、研修の意義を強調されるのですが、公民科の教員にとって、現在ほど研修の必要に迫られている時はないのではないのでしょうか。

私に関心分野としてきた経済思想を例にとりますと、1989年のベルリンの壁崩壊から1991年のソ連邦消滅に至る過程で、私たちは、社会主義（思想）が、リアリティを失っていく様を目撃しました。それに前後して、イギリス、アメリカをはじめとする先進資本主義諸国が、サッチャリズム、レーガノミックスなどと呼ばれる強固な市場信仰・競争信仰に基づく資本主義運営でいわゆる先進国病の克服に成功するのを見るにつけ、私たちは、資本主義こそが、唯一リアリティを持ち得る経済思想との印象を刻印されました。21世紀に入り、コンピュータの発達に伴って、世界のネットワーク化が加速し、世界中がアメリカ主導の資本主義（市場経済）に席卷されるグローバリゼーションが進行したことも、その印象を強めました。ところが、ここへ来て、私たちはまた、新たな事態に直面しています。それは言うまでもなく、昨年9月のリーマン・ブラザーズ経営破綻で始まった世界的不況です。その中で、今度は、過度の規制緩和や過度の市場化など、資本主義（市場経済）を徹底しすぎた点にも問題はなかったのか議論になっています。

私たちの、そして生徒たちの生きる現代は、このように大きく揺れています。それは、今挙げた経済に限らず、家族、社会など様々な分野について当てはまることだと思います。都倫研は、少人数での読書会、研究会を伝統としてきたことでも明らかなように、教員にとって学びの場を提供するものです。ぜひ、多くの皆様が、今後とも都倫研で学んでくださることを期待して、巻頭の言葉と致します。

# 「紀要」 第47集 目 次

## 巻頭言 「都倫研紀要第47集を刊行するにあたって」

会長（東京都立若葉総合高等学校長）立石武則先生 …… 1

## 総会ならびに第一回研究例会

次第 ……	3
平成19年度会務報告 ……	4
平成19年度決算・監査報告 ……	6
平成20年度役員・事務局構成 ……	7
平成20年度事業計画 ……	8
平成20年度予算案 ……	9
平成20年度研究主題と研究体制 ……	10
講演「『戦後日本社会』再考」 東京経済大学教授 桜井哲夫先生 ……	12

## 第二回研究例会

公開授業 高3「政治・経済」 東京都立山崎高等学校 宮路みち子先生 ……	15
研究発表「『アガペー』は神の愛を表す言葉か？」 東京都立山崎高等学校 中村康英先生 ……	17
講演「鎌倉仏教の新しい見方」 東京大学大学院教授 末木文美士先生 ……	25

## 第三回研究例会

公開授業 高1「現代社会」 東京都立板橋高等学校 渡辺安則先生 ……	29
講演Ⅰ「都倫研の思い出一人と事業」 会社役員 井上 勝先生 ……	30
講演Ⅱ「意味の探究—都倫研から学び考えたこと—」 東京都立白鷗高等学校 葦名次夫先生 ……	35

分科会報告 …… 40

東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約 …… 41

事務局だより …… 42

編集後記 …… 43

# 平成20年度都倫研総会ならびに第一回研究例会

2008（平成20）年6月21日（土）

於 お茶の水女子大学附属高校

## 次 第

開会

挨拶 会長 東京都立若葉総合高等学校長 立石武則先生

1) 総会（15：00～15：30）

議事

(1) 平成19年度 会務報告

(2) 平成19年度 決算報告並びに会計監査報告

(3) 平成20年度 役員改選並びに事務局構成

(4) 平成20年度 1 事業計画案審議

2 研究計画案審議

(5) 平成20年度 予算案審議

(6) その他

2) 平成19年度研究活動の総括（15：30～15：40）

研究部長 東京都立武蔵高校 佐良土 茂先生

3) 分科会構成（15：40～15：50）

4) 講演（16：00～17：30）

『戦後日本社会』再考]

東京経済大学 桜井哲夫先生（社会学）

閉会

## 平成19年度 会務報告

1 研究成果の刊行 「都倫研紀要」第46集刊行

2 研究会報の刊行 「都倫研会報」第70号の刊行

3 総会並びに第一回研究例会 平成19年6月23日(土)

会場 お茶の水女子大学附属高校

(1) 平成18年度研究活動の総括

(2) 分科会構成

(3) 講演「哲学の考え方」

お茶の水女子大学 土屋賢二先生

4 夏季合同分科会 平成19年8月23日(木) 会場 お茶の水女子大学附属高校

〈実践報告ならびに研究発表〉

(1) 「教育実習生の指導について—地理A、世界史A、現代社会—」

東京都立荒川商業高校(定) 多田統一先生

(2) 「地球温暖化を考える現代社会の授業」

元都立高校講師 小橋一久先生

(3) 「論理的思考力を伸ばす」

お茶の水女子大学附属高校 村野光則先生

(4) 「カントの思想」

東京都立福生高校 本間恒男先生

5 冬季合同分科会 平成19年12月26日(水) 会場 国士舘大学

〈実践報告ならびに研究発表〉

(1) 「研究所めぐりと公民科教育」

東京都立荒川商業高校(定) 多田統一先生

(2) 「脱アイデンティティ—エリクソンからミード、そしてフーコーへ—」

東京都立立川高校 菅野功治先生

(3) 「大学学部課程における哲学・倫理学教育と高等学校における『倫理』との連携について」

国士舘大学 木阪貴行先生

6 研究例会

◇第二回研究例会 平成19年11月20日(火) 会場 東京都立調布北高校

(1) 公開授業 高1「倫理」 「仏教と日本人の思想形成」

東京都立調布北高校 三森和哉先生

(2) 研究協議

(3) 講演「動物化とはなにか」 東京工業大学世界文明センター 東 浩紀先生(哲学)

◇第三回研究例会 平成20年2月21日(木) 会場 東京都立西高校

(1) 公開授業 高1「現代社会」ディベートを利用した授業

「日本はスーパーやコンビニの24時間営業をやめるべきである。是か非か。」

東京都立西高校 岡田信昭先生

(2) 研究発表

「経済と倫理のあいだ—NICCの最近の教材マニュアルを巡って—」

東京都立西高校 新井 明先生

(3) 講演 「授業と能楽—『倫理』の授業とのかかわり—」

東京都立葛飾野高校校長 辻 勇一郎先生

平成19年度 決算・監査報告 (単位：円)

総括の部

収入	支出	残額	
650,295	177,672	472,623	(単位：円)

収入の部

科目	予算	決算	備考
会費	90,000	64,000	個人会員からの会費
補助金 1	200,000	200,000	上廣倫理財団より援助
補助金 2	30,000	30,000	自動車教育振興財団より援助
寄付金	0	100,000	個人会員より寄付
雑収入	0	629	利息
繰越金	255,666	255,666	
合計	575,666	650,295	

支出の部

科目	予算	決算	備考	
研究大会及び 研修会	諸謝金	96,000	79,000	講演・発表・公開授業謝金
	旅費	6,000	4,000	講師旅費
	借料・賃料	0	0	研究例会会場
	印刷製本費	0	0	
	会議費	20,000	19,348	分科会活動費
	消耗品費	2,000	0	文具等
	通信運搬費	20,000	5,000	大会案内郵送費、通信連絡費
	小計	144,000	107,348	
調査研究	会議費	10,000	0	
	消耗品費	1,000	832	文具等
	通信運搬費	2,000	0	郵券、宅配便
	小計	13,000	832	
成果の刊行	印刷製本費	200,000	55,650	紀要、会報
	通信運搬費	5,000	0	紀要送付
	小計	205,000	55,650	
計	362,000	163,830		
	事業費事務局費	10,000	13,842	
	予備費	203,666	0	
合計	575,666	177,672		

上記の決算報告は、正確かつ適正であることを証明します。

平成20年6月2日

会計監査 新井 明

会計監査 山本 正

## 平成20年度 役員改選並びに事務局構成

### 平成20年度都倫研役員

役員	氏名 (所属)
会長	立石武則 (若葉総合)
副会長	山本正 (足立)、新井明 (西)
会計監査	町田紳 (三商)、本間恒夫 (福生)
常任幹事	大谷いづみ (立命館大学)、工藤文三 (国立教育政策研究所)、佐良土茂 (武蔵)、本間恒男 (福生)、増淵達夫 (都教育庁)、西尾理 (小金井工業)、廣末修 (新島)、小泉博明 (文京学院大学)、及川良一 (支援センター)、渡辺安則 (板橋)
幹事	石塚健大 (芝)、岩橋正人 (三鷹)、大野精一 (日本教育大学院大学)、岡田信昭 (西)、岡田博彰 (豊多摩)、岡本重春 (光丘)、蕪木潔 (文京)、上村肇 (都教育庁)、黒須伸之 (墨田川)、幸田雅夫 (玉川聖学院)、小島恒巳 (蒲田)、小寺聡 (南多摩)、小林和久 (日大二高)、坂口克彦 (総合工科)、佐藤幸三 (福生定)、杉本仁 (南多摩定)、関根荒正 (狛江)、田久仁 (駒場)、多田統一 (荒川商)、富塚昇 (青山)、徳久寛 (玉川)、原田健 (国分寺)、平井啓一 (保谷)、藤野明彦 (国分寺)、伏脇祥二 (園芸)、三森和哉 (目黒)、宮澤眞二 (清瀬)、宮路みち子 (山崎)、宮原賢二 (小山台)、諸橋隆男 (大妻中野)、吉野明 (鷗友学園)、吉野聡 (学大附属)、和田倫明 (産業技術高専)、渡辺範道 (都教育庁)
顧問	小川輝之、蛭田政弘、細谷齊、佐藤勲、井上勝、岡本武男、増田信、G. コンプリ、尾上知明、中島清、寺島甲祐、井原茂幸、酒井俊郎、鳴森敏、金井肇、平沼千秋、沼田俊一、山口俊治、勝田泰次、永上肆朗、伊藤駿二郎、菊地堯、杉原安、小川一郎、秋元正明、木村正雄、中村新吉、坂本清治、宮崎宏一、大木洋、成瀬功、小河信國、小嶋孝、新井徹夫、海野省治、喜多村健二、水谷禎憲、辻勇一郎

### 平成20年度都倫研事務局

都事務局長	村野光則 (お茶の水女子大学附属)	
研究部	部長	佐良土茂 (武蔵)
	副部長	多田統一 (荒川商・定)
	副部長	石塚健大 (芝)
	副部長	宮路みち子 (山崎)
広報部	部長	和田倫明 (産業技術高専)
	副部長	坂口克彦 (総合工科)
	副部長	照井恒衛 (葛西南・定)
	副部長	渡辺克彦 (武蔵・定)
会計	石塚健大 (芝)	
事務局員		渡辺安則 (板橋)
		平井啓一 (保谷)
		富塚昇 (青山)
		三森和哉 (目黒)
		黒須伸之 (墨田川)

## 平成20年度 事業計画

- 1 研究成果の刊行 「都倫研紀要」第47集の刊行
- 2 研究会報の配信 「都倫研会報」第71号の配信
- 3 総会ならびに第一回研究例会 平成20年6月21日(土)  
会場 お茶の水女子大学附属高校  
(1) 平成19年度研究活動の総括 都倫研研究部  
(2) 講演 「『戦後日本社会』再考」 東京経済大学 桜井哲夫先生(社会学)
- 4 研究例会の開催  
◇第二回 11月6日(木) 都立山崎高校  
◇第三回 平成21年2月中旬
- 5 研究分科会 2分科会構成で各々3～4回を予定

## 平成20年度 予算案

### 収入の部

科 目	予 算	備 考
会費	70,000	個人会員からの会費
補助金 1	200,000	上廣倫理財団より援助
補助金 2	30,000	自動車教育振興財団より援助
繰越金	472,623	
合計	772,623	

### 支出の部

科 目	予 算	備 考	
研究大会および研修会	諸謝金	96,000	講演・発表・公開事業謝金
	旅費	6,000	講師旅費
	借料・損料	0	研究例会会場
	印刷製本費	0	
	会議費	40,000	分科会活動費
	消耗品費	2,000	文具等
	通信運搬費	20,000	大会案内郵送費、通信連絡費
	小計	164,000	
調査研究	会議費	10,000	
	消耗品費	1,000	文具等
	通信運搬費	2,000	郵券、宅配便
	小計	13,000	
成果の刊行	印刷製本費	200,000	紀要、会報
	通信運搬費	10,000	紀要送付
	小計	210,000	
計	387,000		
事業費事務局費	30,000		
予備費	355,623		
合計	772,623		

## 平成20年度 研究主題と研究体制

### 〔本年度の研究主題〕

国際社会の一員としての自覚にもとづいて、現代の社会について理解を深めるとともに、よりよい未来を目指して主体的に生きる態度を育成する指導の研究

### 〔研究主題設定の趣旨〕

「国際化」ということが言われて久しいが、近年この傾向はますます強くなっている。アメリカに端を発した金融問題が世界の経済に影響を与えていることに象徴されるように、今や一国内の出来事は単にその国の出来事で終わることなく、国際的な広がりのある問題ともなる。このことは国際的な協力態勢が不可欠であることを物語っている。今ほど、国際社会の一員であることを自覚して行動することが必要な時代もないであろう。

国内での金融や環境問題、上昇の兆しを見せる物価の問題などは、まさに国際的な影響を受けて展開している。さらに若者のワーキングプアと格差の問題、急激な少子化による年金・医療問題なども緊急に解決すべき課題として挙げられる。我が国の場合これらの問題に加えて、行政や政治のシステムの改革が切に求められている。教育に関しては、「教育改革」の名のもとに、様々な改変が行われているが、有効な手だてとはならず、いたずらな組織改編と事務・文書処理の増加は、教育現場に多忙と混乱をもたらしている。今こそ教育は偏狭なナショナリズムを脱し、国際協調と個人の充実した人生への支援を理念とすべき時である。

われわれが未来を託すべきは、われわれの目の前にいる生徒である。学校現場に立つわれわれにとって最も問題なのは、生徒の内面に学びの意味が確立されず、学習がともすれば定期的に行われる試験と大学受験のために矮小化されたものとなってしまっている点である。われわれは学習が先ずわれわれがおかれている現状を正しく認識し、その上で人生を善く生きるためのものであることを語ろう。特に公民科は、青年期にある生徒が自らの置かれた社会の現実を正しく把握し、その上で人生における自らの位置と課題を認識し、あるべき姿を考えるための唯一の教科である。この教科なくしては、生徒は生き方を考える手がかりを失うであろうし、生涯にわたって古今東西の偉大な先哲の考えを指針として、有意義な人生を形成する機会をも失うであろう。その点公民科は自らの存在理由を誇ってもよいのではなかろうか。また誇るべき意義を自覚すべきではなかろうか。一層の効率化と偏差値のみで計られる学力向上の要求など、われわれを取り巻く環境も厳しいものがあるが、今一度公民科本来の役割を自覚して、生徒が国際社会の一員としての自覚に基づいて広く国際社会に目を向け、自己のよりよい人生を形成する態度を身につけるとともに、未来の社会を形成しようとする意欲を育てる支援を試みようではないか。われわれの求めるのは小手先の技術ではない。生徒が現代の社会の諸問題を冷静に受け止め、これらの問題を批判的に考察し、自ら行動できる態度と、周囲の環境に安易に流されないしっかりした人生観を形成することである。そのためにわれわれに求められているのは、われわれ一人一人が指導内容と指導方法の研究を一層すすめるとともに、その成果をお互いに批判し合い、より高いものとするのである。

以上の趣旨にもとづいて、上記の主題を設定し、以下の2点に重点をおいて研究をすすめることにする。

- (1) 『現代社会』『政治経済』の指導内容では、戦争と平和、開発と環境、高度情報化、少子高齢化、国際化など現代社会の特質とその問題点を倫理、社会、文化、政治、経済などの様々な観点から考察する学習を通して、生徒一人一人が国際社会に生きる人間としての自覚を深め、いかに生きるかを主体的に考えることを可能にする指導内容と指導方法について研究する。
- (2) 『倫理』の指導内容では、生徒が国際社会に生きる人間として、青年期の意義と課題、人生における哲学や宗教、芸術の意義、日本の思想等の学習を通して、自己の生きる課題とのかかわりにおいて、人間としての在り方生き方について思索を深め、良識ある公民として必要な能力と態度を身につける指導内容と指導方法について研究する。

### 〔研究体制〕

以上の研究主題・趣旨を踏まえた上で、本年度は次の二つの分科会を設けることにする。

#### 第一分科会「現代社会の政治・経済的な問題に関する指導の研究」

生徒が、現代社会の政治・経済的問題について、多角的、多面的に考察・理解し、民主社会の一員として主体的に取り組むための指導内容、指導方法について研究をすすめる。

#### 第二分科会「現代社会の倫理的な問題に関する指導の研究」

現代の倫理的課題を踏まえた上で、先哲の思想を手がかりに、生徒が人間の存在や価値について思索を深め、現代の人間としての在り方生き方を主体的に求める態度を育成する指導内容、指導方法について研究をすすめる。

## 「戦後日本社会」再考

東京経済大学教授 桜井哲夫

今の社会を考えるのに60年代を区分点にして、オリンピック以前以後のように言われることがある。日本では大衆社会論争が50年代後半から起こり、戦後は終わったのかという議論があった。映画『三丁目の夕日』が昭和33年、二作目が34年の設定で、ちょうど60年代の一步手前がノスタルジーをかき立てている。それはなぜか。60年代の十年間で日本の社会は大きく変貌した。長屋生活の延長で、貧しくも近隣共同体が残存していたのが、個々のつながりがズタズタになった。都合の良い映画であり、女性の自由にも目をつぶったノスタルジーといえなくはないが、ノスタルジーをノスタルジーと切り捨てるのではなく、なぜそれが出てくるかを考えなければならない。

データでみると60年から05年まで就業人口比率は見事に第一次産業が減り32.7%から5.1%になった。サラリーマン化が進み、社会生活の形態自体が全く違うものになった。特に60年代の十年間で大きく変化した。渦中の人間は全く意識できないほど実感できず困惑が起こる。先進国では世代間抗争が激化する。都市化、消費社会化、新中間層などの議論が起こる。20年後、79年に『ジャパン・アズ・No.1』が書かれ、80年に自動車が1100万台で世界一になるが、60年代初めは50万台だった。小学生の自殺やいじめなどの問題が噴出する。24時間都市の出現。20年間で日本社会は巨大な変動を経験した。そういう国はほかにない。大きな実験装置の中に叩き込まれたようなもので、中の人間たちは全く気付かないで、いろいろな問題に目をつぶって、昔のようなモラルを強制してトラブルになる。忙しいから踏みとどまって考えるという気力がない。

そこで『ことばを失った若者たち』（講談社現代新書）を書いた。勢いだけで動いていき、60年代の世代間対立の問題に面と向き合わなかったために、70年代のしらけ現象がおこった。お互いにそっぽを向いて、対人関係をうまく結べない若者はあちこちにいる。アメリカでもフランスでも共通しているのは、内面的空虚感である。技術化と官僚統制が進み、他人にあまり深くかかわりたくない。村上春樹の『風の歌を聴け』の世界のキーワードは「空っぽ」である。お互いに共通の関係が持てない、記号を付けた人間。80年代のナルシズムカルチャーのシンボルのような小説世界である。300万部売れた『ノルウェイの森』は、先進産業社会に共通する若者たちの関係、相互のつながりが持てないことを表す。『ユリイカ』の村上春樹特集で、セラピー小説だと言ったのは、内面の空虚感からどうやって手がかりを見つけるかという問いかけの小説だからである。

こういうものが80年代に現れてきている。子供の自殺が問題になり文部省がいじめの調査をしたことなどもみな忘れている。すべてが商品化される社会において、宮崎事件などは、その流れの中に置くとだんだんわかってくる。相互のつながりが欠けた事件。社会表象として大きな事件で代理される。秋葉原の事件も80年代の宮崎事件と同じような位置を占める。この20年で何が変わったのか。まともに向き合っていないのではないか。

バブルが崩壊したあと10年単位で事件を見れば、阪神淡路大震災、オウム真理教のサリン事件、酒鬼薔薇事件と、10年単位で大きな事件が起こっている。00年代にはアキバ事件と、節目にこういう事

件が起こるのは何らかの一つの危機の表出である。ガタが来ている部分に目を当てろという合図のようなものがでてきているのではないか。

事件が出てくると、ワイドショーが騒いで叩いて、テレビ評論家たちがご託宣を並べて終わってしまう。後は厳罰に処せばよいと。宮崎事件も死刑執行を新聞は扱っても、まともなあれは何だったかということ論じていない。事件があれば厳罰の繰り返しである。暴力的な問題はいろいろな形で起こってきている。われわれだけではない。アメリカでの高校の乱射事件など、暴力的な問題では、青少年犯罪はわが国では極端に少ない。しかしそれはときどき噴出する。普段は問題が明るみに出ないままに抑圧されている。それが爆発したときにどう受け取るのか。宮崎事件、酒鬼薔薇事件、秋葉原事件と、同じような事件が繰り返される。このことになぜ気がつかないのか。

ネットたたきをして意味がない。ネットを敵視するのは間違いである。ネットは新聞やテレビを超えたメディアである。そこに多くの人間がなぜ集まってくるのか。今のティーンエイジャーには絶対に必要なもので、止められたら関係が作れないのである。『三丁目の夕日』的な村社会的なものが残存しているところでは、接触恐怖がない。サラリーマンならノミネーションがあった。身体的な接触が当たり前だった。だから殴り合いのけんかもある。肉体的なぶつかり合いの中で、手加減しながら折り合いをつけて関係を作っていく。ビートたけしも、俺たちの頃と違って今の連中は喧嘩慣れしていない、と言っていた。喧嘩慣れしていれば手加減し、また喧嘩しては仲直りしていた。

しかし、都市社会は接触恐怖の社会である。70年代にはじめてヨーロッパに行って、一番違和感があったのは、ちょっとふれると「パルドン」とあやまることである。他人に触れることはいけないこと、という都市社会化の孤立した個人がある。日本の満員電車などとんでもないという。日本に帰ってきて、本を書くきっかけとなったのは、80年代初めに、あるときに若者にちょっと触れたら殴られそうになって仰天したことである。都市社会化が進んで、お互いの肉体的な接触だけでなく、コミュニケーションを切ってしまう、そういう社会が始まってきている。子供の社会も変わってくる。ちょっとしたことで親がでてくる。子供の文化が崩壊し、遊びが奪われる。遊びを通じて関係を作ることができなくなる。歯止めがなくなると、いじめもとことんまでいってしまう。

接触恐怖とは、フロイトが『ナルシズム』の中で指摘した自己愛集団の中で自己愛を抑制して同性愛が仲間意識の形成につながるのだが、自己愛がコントロールされないナルシズム的パーソナリティが肥大化し、その延長上にネットが接続された。匿名でいられる、傷つきたくないが他人に認めてもらいたい、賞賛されたいが深く関わりたくない。そういう人間にとって依存する唯一の空間である。ネットは、それはそれとして認めなければならない。ネットをつぶせばもっと内向し、暴力の渦に踏み込んでしまう。

現場もどれだけ意識しているか、ケータイの文化を。ケータイに依存しているのではなく他愛のないやりとりをする。モラトリアムで知られるエリクソンがアイデンティティを論じたときに、青年期の恋愛はおしゃべりに終始するといった。自己感に不安があるからおしゃべりによって自己確認をしている。だからおしゃべりは重要。自分の存在を確認する手続き。

ティーンエイジャーのメールのやりとりは自己確認。メールの返事がくることが重要。相手が返事をくれない孤独感。秋葉原の事件でもメールの返事が来ない状況に追い込まれている。自己確認ができない。気楽にバカ話ができない。ゼミのコンパが成り立たない。ゼミの教員と話ができない。お酒を飲んで話をするということがいやだ。ネットをつぶそうとしても何の解決にもならず問題をかえっ

て悪化させる。

グローバルゼーションという名のもとで世界が資本の論理でおおわれてしまったことは、問題をさらに混乱させた。かつてなら安定した職業につけた人間が、つけなくなってしまい、さらに土台を揺るがされ絶望しやすくなっている。『蟹工船』が130万部も売れるなど、信じられない話だが、困難な部分が出てきている帰結とするならば、もっと大きな問題があるかもしれない。20年続いたナルシズムカルチャー自体がもっと大きな転機を迎える。問題が解決するどころか拡大している一方で、対応する全体的な指針がない。70年代の締め付けは80年代のいじめとなり、抑圧的な感情統制は必ず子供に問題を起こす。同じことを繰り返していることに気づいていない。我々の社会が曲がり角にきている。

30年間教師をしてきて、学生たちの変わってきた面、変わっていない面がそれぞれあるが、こちらがどれだけ真剣に対応しているかを学生が見ている。いろいろな学生がいるから、それぞれの伸び方がある。視聴率と同じように予備校の偏差値データにもからくりがあるかもしれない。わけのわからない数字によって支配されている構造自体何も変わっていない。

われわれの側が呼びかける言葉を持っているだろうか。みんな聞いてもらいたいのに、聞き手がない。子供たちにどれだけ親近感を持って向き合えるか。理解できなくてもよいが、話を聞く姿勢だけは持ってほしい。話を聞いてほしいという衝動にこの日本はおおわれている。忙しくて親も先生も友達もいない。話を聞いてくれる受け手がないと暴走する。アメリカでもヨーロッパでも同じである。そこをどうやって受け止めてあげるかを考えなければならない。

(記録・文責 和田倫明)

## 平成20年度 第二回研究例会

1. 日 時 平成20年11月6日(木) 午後1時より午後5時30分まで
2. 会 場 東京都立山崎高等学校
3. 内 容

- (1) 公開授業(13:15~14:05) 3年2組必修「政治・経済」

「日本の防衛と日米安全保障条約

～在日米軍基地問題を題材として～

東京都立山崎高校 宮路みち子先生

- (2) 研究協議(14:20~14:40)

- (3) 研究発表(14:45~15:30)

『「アガペー」は神の愛を表す言葉か?』

東京都立山崎高校 中村 康英先生

- (4) 講演(15:40~17:10)

「鎌倉仏教の新しい見方」

東京大学大学院人文社会系研究科

末本文美士(ふみひこ)先生(インド哲学仏教学)

### ◆公開授業について(宮路先生より)

東京教師道場の公開授業と兼ねて行います。現在、2001年の米同時多発テロ事件を契機とした米軍再編成が世界規模で行われています。それに伴い在日米軍基地の編成も変化することが決定していますが、生徒にとって、在日米軍基地の問題は遠い問題と捉えられがちです。本時では、主に沖縄の基地問題を扱い、視聴覚教材などをもとに米軍基地について考える授業を行いたいと考えています。

### ◆研究発表について(中村先生より)

ギリシア語で愛を表す言葉であるアガペーとエロスは一般的に広く知られている言葉である。アガペーはキリスト教的な神の愛を表す言葉であり、エロスは性的な愛を語る際に使うことができる言葉であるとともに、自分の中にない、より価値のあるものを求め自分のものにしたいと願う愛として知られている。

アガペーはキリスト教的な神の愛を表す言葉であると断言した代表的な研究者はニーグレンである。アガペーはキリスト教の愛の本質を表す言葉であり、エロスの本質は自己愛であるとする彼の考え方は現在のアガペーとエロスについての一般的な理解に深い影響を与えている。いま述べたような考え方は別の理解が、初代キリスト教の教父の中にあることが指摘されている。アガペーについての別の理解を紹介する。

### ◆講師紹介

末本文美士(すえき ふみひこ)1949年生まれ。東京大学文学部印度哲学専修課程卒業。同大学院博士課程単位取得退学。仏教学専攻。東方学院講師、東京大学文学部助教授を経て、現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授。古来日本人の精神的バックボーンをなしてきた仏教の史的研究を基盤

として、ここ数年は日本近代思想を仏教の立場からとらえ直し、今日の哲学的諸問題にも切り込む独自の思想構築を試みている。『鎌倉仏教形成論』（法蔵館）『鎌倉仏教展開論』『思想としての仏教入門』（トランスビュー）『日本宗教史』（岩波新書）などの著書を相次いで出版、古今の宗教思想史を概観するとともに現代の日本仏教にも理論と実践の両面から果敢な提言を展開している。多年にわたる研究の功績が評価され、第十六回「中村元東方学術賞」を受賞した。（中外日報HPより）

◆ご講演について（末木先生より）

かつて常識であった鎌倉新仏教中心論は、黒田俊雄によって提示された顕密体制論によってほぼ完全に否定されたが、顕密体制論で中世仏教が説明しきれるかということ、それも無理と考えられる。それでは、鎌倉仏教をどのように見たらよいのであろうか。それには、新仏教中心論のように宗祖中心ではなく、かといって顕密仏教の枠の中にも入りきらない、当時の新しい自由な仏教運動を検証することが必要である。ここでは、最近の拙著『鎌倉仏教展開論』（トランスビュー、2008）に基づいて、当時の仏教思想を検討し、中世的なるものが今日どのような意味を持ちうるのか、考えてみたい。（末木先生からは、できれば『鎌倉仏教展開論』または『日本宗教史』（岩波新書）を読んでおいていただきたいとのメッセージをいただいています）

## 「アガペー」は神の愛を表す言葉か？

東京都立山崎高等学校 中村康英

ギリシア語で愛を表す言葉であるアガペーとエロスは一般的に広く知られている言葉である。アガペーはキリスト教的な神の愛を表す言葉であり、エロスは性的な愛を語るときに使うことができる言葉であるとともに、自分の中にない、より価値のあるものを求め自分のものにしたいと願う愛として知られている。以上のような、アガペーとエロスについての考え方は一般的に承認されているものであり、それは教科書の中にも反映されている。

その根拠を最近の高等学校教科書において表記されていることを通して示しておく。

「放蕩のかぎりをつくし、落ちぶれて帰ってきた息子をやさしくだきかかえる父親に神をたとえて、神の愛がどんなものであるかを教えた。そのような神の愛は、アガペーという言葉で表現されるが、それは他者を生かす無差別、無償の愛であり、ギリシア的な、自分に欠けたより価値の高いものを求める愛であるエロスとは異なる。」(東京書籍)<sup>1</sup>

「エロスは、真・善・美のような価値あるものを求めて天上をあこがれていく『求める愛』であるのに対して、アガペーは、……(中略)……どんな価値のない者に対しても無条件に上から注ぎかける無差別の『与える愛』である。」(山川出版)<sup>2</sup>

「アガペーとしての愛は、価値や報いがあるからそのものを愛するというのではなく、無価値と思われるものをこそ愛し、はげまし、勇気づけてくれるものである。この愛は無差別平等の無償の愛として万人にそそがれる。」(清水書院)<sup>3</sup>

「魂をイデアへと向かわせる情念を、エロスという。完全なものへの思慕であるエロスは、人間の徳を向上させる原動力となる。」(清水書院)<sup>4</sup>

「(アガペーとは)どんなに弱く、無価値のように見える人に対しても、常に無償で、無差別に与え続ける愛のことで、価値のあるものを求めるギリシャ思想のエロスとは対照的である。」(中教出版)<sup>5</sup>

この教科書のなかで描かれている愛は、キリスト教的な神の愛を表す言葉としてのアガペーと、自

1 平木幸次郎ほか7名『倫理』東京書籍株式会社、51頁、2008年。

2 湯浅泰男ほか3名『倫理』山川出版社、35頁、2007年。

3 菅野覚明・熊野純彦・山田忠彰ほか4名『新倫理 改訂版』清水書院、41頁、2007年。

4 同書、31頁。

5 勝部真長・持田行雄ほか8名『倫理』中教出版、48頁、脚注①、2003年。

分に欠けたより価値の高いものを求め、自分のものにしたいと願うエロスである。ここでの愛の定義は、A. ニーグレンの愛についての理解の仕方に従って述べられていると考えられる。

アガペーとエロスについて論じ、アガペーはキリスト教的な神の愛を表す言葉であると断言した代表的な研究者はニーグレンである。アガペーはキリスト教の愛の本質を表す言葉であり、エロスの本質は自己愛であるとする彼の考え方は現在のアガペーとエロスについての一般的な理解に深い影響を与えている。いま述べたような、アガペーとエロスについて考え方とは別の理解が、オリゲネスの中にあることが指摘されている<sup>6</sup>。

## 1 節 アガペーとエロスについて

アガペーとエロスという愛を表す言葉が、研究者にはどのように理解されているのであろうか。

アガペーとエロスについて論じ、その意味をキリスト教的な神の愛を表す愛と、ギリシア的プラトンの愛を表す言葉として断言した代表的な研究者はニーグレンである。アガペーはキリスト教の愛の本質を表す言葉であり、エロスの本質は自己愛であると彼は述べる。

ニーグレンはエロスという言葉で表わされる愛とアガペーという言葉で表わされる愛について次のように語る。

「エロスとアガペーの相違は程度の差ではなくて、種類の相違なのである。」<sup>7</sup>

「一方の場合には、我々は自己中心の宗教を得るし、他方の場合は神中心の宗教を得るのである。」<sup>8</sup>

「ひとつの場合には神が個人の必要と願望の究極的充足として求められるし、他の場合には、神が人間の自我を全く支配する全能者として求められるのである。」<sup>9</sup>

アガペーは次のようなものであるとニーグレンは語る。

「アガペーは神ご自身の人間に至る道である」<sup>10</sup>

「アガペーはキリスト教の愛の標準である」<sup>11</sup>

「十字架上に示された愛は神ご自身の愛である」<sup>12</sup>

エロスとアガペーは本質的に種類を異にする愛であり、それぞれ自己と神という異なった方向を目指す愛であるとニーグレンは語る。さらに、彼は、アガペーで表される愛は神の愛の下降運動であり、神の愛がその愛の根本であると述べている。このアガペーという言葉によって人間の自己に対する愛

6 オリゲネス Origenes 184/5-253/4キリスト教最大思想家の一人 最初の聖書学者アレクサンドリアに生まれる。ストア派、プラトン、中期プラトン主義の知識を吸収した。

7 Nygren, Anders, *Den kristna kärlekstanken*, 1930, (大内弘助訳「アガペーとエロス」I、新教出版、1966年、20頁。

8 同上書、I、14頁。

9 同上書、I、15頁。

10 同上書、I、49頁。

11 同上書、I、62頁。

12 同上書、I、87頁。

を表すことはできないと、彼は考える。<sup>13</sup>

エロスについては次のように語る。

「エロス愛は、隣人を隣人自身のためにではなく、自分の必要を満たすためや、善への向上のための手段として求めるのである。…（中略）…そしてこの愛は、人間が、感覚の世界から実在の世界へ、昇っていく上昇運動の一つである。」<sup>14</sup>

「自己愛はエロスの本質そのものである。」<sup>15</sup>

さらに、エロスで表される愛において神自身には愛が欠けていると、ニーグレンは述べている<sup>16</sup>。

以上のように、アガペーは神の愛であり、神から人に向かう下降運動でもあると定義し、エロスは自己愛であり、必要を満たすための上昇運動であるとニーグレンは断言する。その考え方に立ってオリゲネスの愛について次のように主張する。

「救いの道についての彼（オリゲネス）の見解は、同じように明白にエロス説に依存している。それは、上昇運動、すなわち上昇の観念に全く支配されている。」<sup>17</sup>

オリゲネスの神の救いについての理解は、下降運動としての十字架の上に示された神の愛、すなわちアガペーに基づくものではない自己愛というべきエロスに基づいているとニーグレンは述べている。即ち、オリゲネスはキリスト教を代表する3世紀の思想家ではあるがキリスト教の神によって表現された愛を理解せずにプラトンの範疇の中で神の愛を理解しているので真のキリスト教徒ではないと主張しているのである。

以上のような、アガペーは神の愛であり、神から人に向かう下降運動であると定義し、エロスは自己愛であり必要を満たすための上昇運動であるという主張に対し、J.M. リストはエロスについてニーグレンとは別の理解を提示し、ニーグレンに反論している。

リストは『エネアデス』でプロティヌスが一者（神）はエロスであると述べているのに言及して、次のように述べている<sup>18</sup>。

「一者（神）をエロスというだけで、ニーグレンの見方に対する反論になる。何故なら、一者（神）が上昇する場所はどこにもないからである。」<sup>19</sup>

エロスという言葉が神である一者に帰せられることによってエロスという言葉はニーグレンのいう

13 同上書、I、197頁参照。

14 同上書、I、193頁。

15 同上書、I、195頁。

16 同上書、I、197頁参照。

17 同上書、I、200頁。

18 プロティヌス 204/5-270 新プラトン主義の創始者。アレクサンドリアでアンモニオス・サッカスに師事した。オリゲネスと同門。

19 Rist, John M., *Eros and Psyche*, University of Toronto Press, 1967, P81.

意味とは異なる意味を持つことになる。なぜなら、欠けるところのない一者(神)がさらに善くなる余地はないからである。このように、一者(神)が上昇運動の一つであるはずのエロスであるということによって、エロスで示される愛はニーグレンが主張する意味とは別の意味を持った言葉ではないかという見方を提示することができるようになる。即ち、エロスは自己愛であり必要を満たすための上昇運動としての愛では無く、アガペーの様な下降を示す愛であることを示唆することになる。リストは次のように述べる。

「一者(神)のエロスは上へも下へも向かわない。しかし、間接的ではあるが、一者は下へ向かう動きの原因である。」<sup>20</sup>

さらに、プロティヌスにおいては示唆されているだけの下向きのエロスがオリゲネスにおいてはプロティヌス以上にはっきり示されているとリストは主張するのである。

「渴望であるエロスだけでなく下向きに流れるエロスをオリゲネスは認めている。」<sup>21</sup>

「プラトンとオリゲネスの間の相違は次のようなことである。即ち、知恵の愛又はアイデアである神もしくは一者の愛が非人格的なものであり、生命のないものの愛であるのに対し、オリゲネスの花婿の愛は人格的な愛である。」<sup>22</sup>

聖書の『雅歌』の花婿は人格を持つ雲た花婿であり、その愛はエロスという言葉で表現されている。そして、エロスという言葉で表現される愛で花嫁を愛する花婿とはキリストのことである。又、花嫁とは教会のことである。従って神であるキリストの愛は下向きであり、その愛はここではエロスという言葉で表現されている。だから、ニーグレンのように、アガペーは神の愛であり、神から人に向かう下降運動でもあるとし、エロスは自己愛であり、必要を満たすための上昇運動であると定義することはできないとリストは主張するのである。

エロスは自己愛であり、必要を満たすための上昇運動であるというニーグレンの主張に対し、プロティヌスにおいて示唆され、オリゲネスにおいてはっきり示されている下向きのエロスを提示することによって、リストは反論している。

ニーグレンの、神の愛であり神から人に向かう下降運動としてのアガペーと自己愛であり必要を満たすための上昇運動としてのエロスという構造を踏まえたとうえで、リストは、エロスには下向きの運動があることを示すことで反論している。しかしC.オズボーンはニーグレンが提示した構造自体に異論を唱え次のように主張する。

「『プラトンにとって、愛は、まず第一に、足りないために手に入れたいと望む何かを求める欲望である』というこの主張はニーグレンがプラトンの『饗宴』を読んでいくときの見方である。」<sup>23</sup>

20 Ibid., p.83.

21 Ibid., p.207.

22 Ibid., p.210.

23 Osborne, Catherine, Eros unveiled, Oxford University Press, 2002, p.54.

「ニーグレンがディオティマの話のなかに見出したような、欲しいものを手に入れようとするエロスについての見解は、キリスト教のモチーフとしては納得のいくものではないということに同意することと、エロスを完全に否定することは、全く別のことである。」<sup>24</sup>

オズボーンはニーグレンが示すエロスの意味自体に疑問を呈しているのである。ニーグレンが提示した意味でのエロスをキリスト教の神の愛を示すものとしては受け入れることができないからといって、エロスで表現される愛自体を拒否することにはならないと主張している。

「プラトンの『饗宴』は伝統的な方法で読まれるべきではない。プラトン自身が、何かを求める愛の対象を乞い求めると訴えることによって愛が説明されたり、愛が自己愛によって動機づけられているととられるべきではないという理由を示唆しているのである。」<sup>25</sup>

「何かを求める愛の対象を乞い求めると訴えることによって愛が説明されたり、愛が自己愛によって動機づけられているととられるべきではないとプラトン自身、示唆している。」<sup>26</sup>

ここでオズボーンは、自己愛であり必要を満たすための上昇運動として、エロスを理解すること自体に異を唱えている。そのように異を唱えることはプラトン自身の考えに基づくものでもであると、主張している。

さらに、ニーグレンの主張するアガペーの理論についても異を唱える。

「エロスもアガペーも、寛容な関心と自己中心的な関心によって特徴づけられる愛を示すものである」<sup>27</sup>

アガペーはキリスト教の愛の本質を表す言葉であり、エロスの本質は自己愛であるとするニーグレンの主張に反対し、オズボーンは、アガペーもエロスも他者に対する無償の愛と他者に何かを求める自己中心的な側面の両方を持つ言葉であると、述べるのである<sup>28</sup>。

「『高められたアガペーはエロスと呼ばれる』と雅歌注解のなかでグレゴリウスは言っている。」<sup>29</sup>

「オリゲネスは、二つの言葉の間には重要な相違は全くないと主張している」<sup>30</sup>

「オリゲネスのコメントは、アガペーとエロスという言葉は文の脈略のなかで良くも悪くも表現され得るということを示している」<sup>31</sup>

「高められたアガペーはエロスと呼ばれる」というグレゴリウスの主張と「二つの言葉の間には重要

24 Ibid., p.55.

25 Ibid., p.54.

26 Ibid., p.55.

27 Ibid., p.70.

28 Cf. Ibid., p.70.

29 Ibid., p.70.

30 Ibid., p.70.

31 Ibid., p.70.

な相違は全くない」というオリゲネスの主張を根拠にしてアガペーとエロスは本質を異にする言葉ではなく似た内容を表現できる言葉であるというのである。このような理解に立った上でオリゲネスは、エロスという言葉は、神が与える利益や神の美しさを求める欲望によって駆り立てられるものと理解すべきではないと考えていると、オズボーンは述べる。

「オリゲネスは、エロスという言葉で述べられている神と魂が関わりを持つことを認めている。しかしその愛は神が与える利益や神の美しさを求める欲望によって駆り立てられるものではなく、神の愛の弓矢の傷によって駆り立てられるものである。」<sup>32</sup>

「オリゲネスは、ニーグレンがプラトンの『饗宴』のなかで見出したような肉的な欲望による分析に向かうような傾向を全く示していない。」<sup>33</sup>

オリゲネスにおける「エロス」についての理解は、それは「アガペー」という言葉と共通の意味をもち得る言葉であり、ニーグレンがプラトンの『饗宴』のなかで見出したような傾向を持つものではないとオズボーンは主張するのである。

以上述べてきたように、プラトンの『饗宴』におけるエロスを根拠にして、ニーグレンの主張にオズボーンは反対する。反対の立場に立った上でアガペーもエロスも共通の意味をもった言葉であることを示す。そして「二つの言葉の間には重要な相違は全くない」というオリゲネスの言葉に同意し、無償の愛と、他者に何かを求める自己中心的な側面の両方を持つ言葉であると主張する。

## 2 節 アガペー

アガペーという言葉がオリゲネスがどのように理解していたのであろうか。

『ヨハネによる福音注解』で、愛（アガペー）はキリストを通して働き、人間が霊的に成長することを助ける。そのようにして、神からの愛（アガペー）を心の内に持った人間は十字架上のキリストを誇りに思い、神と人を愛するようになる」と語る。『雅歌注解』では、神の愛は、神の独り子であるキリストが人間になるという謙り（kenosis）の中に現われている視点に立って神は愛（アガペー）であるとオリゲネスは語る。『ヨハネによる福音注解』においても『雅歌注解』においても十字架上のキリストや受肉して人間の罪の償いとして死んだ子の中に神の愛（アガペー）が現われているとオリゲネスは考える。しかし他方で『ヨハネによる福音注解』においても『雅歌注解』においても、割合は少ないながらも、愛（アガペー）という言葉が、この世や悪魔や闇を愛するという文脈でも使われ、この世のものを愛する愛を表すためにアガペーを使うことができると考えている。

## 3 節 エロス

私は『雅歌注解』で使われている115例のギリシア語のエロスに該当するラテン語の言葉を考察し

32 Ibid., p.84.

33 Ibid., p.85.

た。そのうち81例が、魂が、欠けた何かを充足しようとする動きに関するものであった。例えばイサクはリベカを愛した (adamare) というように異性に対する愛 (Prologus-2-23.)、あるいはお金に対する愛 (amor) (Prologus-2-39.) さらに虚栄を愛し (cupidus) (Prologus-2-39.) というようにこの世的なものを求める愛として使われている。このエロスは知恵に対する愛 (エロース) (amor) (Prologus-2-22.) という形でも使われる。さらにこのエロスは魂を地上から天の一番高い端まで導いていく愛(エロース) (amor) であり、それは渴望の渇きによって呼び出されるものである (Prologus-2-1)。ここで述べられているエロスはその対象が善いものであれ、悪いものであれ自分に欠けているものを満たし自分を充足させるために使われている。自分に欠けているものを満たし自分を充足させると言う意味で、その対象が異性であれ、金であれ、虚栄であれ、知恵であれ、天の一番高い端であれ、このエロスはニーグレンが指摘する上昇のエロスの考え方と一致するように見える。

しかし、オリゲネスにおいてエロスはニーグレンが指摘するエロスとは別の使われ方もする。

『雅歌注解』第3巻-14-9で述べられているように。花婿であるキリストは花嫁である教会に愛(エロース)を感じている。花嫁を愛する (amare) 花婿は死すべき花嫁に代わり、死んだ。教会である花嫁に代わって死んだ花婿は、人々にとっては大祭司であり、その大祭司は人々に代わって死んだとオリゲネスは語る。この大祭司とは、「ヘブライ人への手紙」9章11節～14節で述べられている人々のために死んだキリストである大祭司である。彼は、花婿が花嫁に愛を感じているように、人々に愛を感じていると考えられる。ここで述べられている愛は「ヨハネ第1の手紙」4章7節～10節で述べられている神の愛であり「わたしたちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」(日本聖書協会新共同訳) という、神が受肉することによって表現された愛である。その愛を「エロス」という言葉を使って表現することができるオリゲネスは語っているのである。

以上述べてきたように、「エロス」は、主に、この世的なもの等に対する渴望の渇きによって呼び出されるもののために使われる言葉であるが、受肉した神の愛を表現するためにも使うことができる言葉であるとオリゲネスは考えている。

#### 4 節 アガペーとエロス

ニーグレンは「十字架の上に示された愛は神ご自身の愛である」と考え、この愛こそアガペーであると彼は主張する。それゆえエロスという言葉でも神の愛を表現することができるオリゲネスは、プラトン主義者であって使徒以来の伝承に立っていないという結論に達する。

オリゲネスはアガペーという言葉とエロスという言葉が相互に置き換え可能な言葉と考えている。その具体的な例を見ていくことにする。

『雅歌書注解』の序文で cupidus や amor という愛 (エロース) を caritas や directio という愛 (アガペー) という言葉を使ってオリゲネスは表現する<sup>34</sup>。さらに『雅歌書注解』の序文でオリゲネスはある男を愛した女を例に挙げている。ある男を愛する (amare) ことで燃え上がり、そして愛する (cupere) と言った直後に、愛する (diligere) 男をその女は喜ばすとオリゲネスは表現する<sup>35</sup>。

34 Origene, Commentaire sur le Cantique des Cantiques, ed, H. Crouzel, Paris, 1961, Prologus-2-20.

同じく『雅歌書注解』の序文、前例のすぐ後で、完全な愛(アガペー) (caritas)について語る。心の全てをかけて、魂の全てをかけて、力の全てをかけて愛し(amare)熱くなることで完全な愛(アガペー) (caritas)が実現すると主張する<sup>36</sup>。即ち、アガペーはエロスによって実現すると語っているのである。

『雅歌書注解』の第1巻でオリゲネスは花婿の胸に向ける愛について語る。「花婿の胸に向ける愛(エロス)によって動かされることができる」と語った直後に「花婿の胸が愛される(diligere)でしょう」と述べる。同じ花婿の胸がエロスという言葉で表現される愛によって愛されると語られた直後に、アガペーという言葉で表現される愛によって愛されると語るなのである<sup>37</sup>。

『雅歌書注解』の第2巻で、愛(アガペー) (caritas)は全てを耐えと語っているパウロは、愛(エロス) (amor)の力によって語っているとオリゲネスは言う。さらに『雅歌書注解』第3巻で知恵の美しさを愛する人(amator)は知恵を愛する(diligere)人でもあると述べる<sup>38</sup>。又、オリゲネスはアガペーとエロスを「アガペーやエロス」という形で5ヶ所で並列的に並べて愛を表す言葉として使う<sup>39</sup>。

以上述べてきたようにオリゲネスはエロスという言葉のアガペーという言葉に置き換え可能な言葉として理解しているのである。しかし、神はエロスであるという、エロスはこの世的なものを求める愛を意味することのために多く使われているので、より弱い人たちは誤解して躓くかもしれない。そこでオリゲネスは語るのである。

#### 『雅歌注解』序文-2-20 (Prologus-2-20)

「しかしながら聖書はエロスという表現が読者を躓かせることのないようにしているように思える。即ち、より弱い人たちのために、この世の賢者がエロスと呼んでいる言葉に対してよりよい言葉、即ち、アガペーを使っている。」

しかしアガペーとエロスは置き換え可能な言葉であるのでアガペーという言葉さえも「読者を躓かせる」可能性を持っている。ダビデの息子アムノンが妹タマルをレイプしたという聖書の箇所を引用して、エロスの動詞形を使うべきところをアガペーの動詞形を聖書は使い、「(ダビデの娘タマルを)愛した(admare)という代わりに、愛した(diligere)と置き換えた」とオリゲネスは述べる<sup>40</sup>。だから、オリゲネスは「神はアガペーである」という言葉に不安を持つ。

#### 『雅歌注解』序文-2-38 (Prologus-2-38)

「愛(アガペー)は神のものであり、神の贈り物であるのに、必ずしも、人から出ても神に属することや神が望むことへと向かわず、神の動きとみなされていないようにみえる。」

以上述べてきたように、3世紀のアレクサンドリアにおいてアガペーという言葉は必ずしも神の愛を表す言葉として限定されたものではなく、エロスという言葉と置き換え可能な言葉であったのである。

35 Ibid., Prologus-2-43.

36 Ibid., Prologus-2-43.

37 Ibid., 1-6-4.

38 Ibid., 3-7-2.

39 Ibid., Prologus-2-44. Ibid., Prologus-2-45. Ibid., Prologus-2-47. Ibid., 2-11-3. Ibid., 3-7-2.

40 Ibid., Prologus-2-20.

## 鎌倉仏教の新しい見方

東京大学大学院教授 末木文美士

教科書の仏教についての記述をみると、もっともなところとおかしいところがある。仏教史研究でも一番進んでいるのは日本史の領域で、歴史として見ようとするときと思想として見ようとするときにギャップがあり、自分の中でも悩みがある。親鸞・道元・日蓮で日本の仏教を語ることはやめようということにしても、日本の仏教の本を書くにしても、最後には親鸞・道元・日蓮を取り上げなければならなくなり矛盾がある。今の研究状況は流動的で、どういうふう新しい方向に着地させていくか、まだ動いているところである。アナール学派の中世のとらえなおしのように、日本の中世論もその影響を受けて見直しがある。近代化論に対して、むしろ近代と違うものがあつたという見方に向かっている。

中学、高校の教科書では、仏教の全盛時代は鎌倉時代とされる。鎌倉新仏教という運動がおこり、法然・親鸞・道元・日蓮などが、一行専修、ひとつのことだけにうちこんでやるということで、民衆的で実践的な諸宗派ができたというのが、鎌倉新仏教中心史観である。最近の教科書ではもうちょっと広く見る見方も出てきているが、倫理のほうは新仏教中心論が強い。

鎌倉時代に宗祖が出て生まれたというのが、鎌倉時代にはこういう宗派はなく、おそらく1400年代ぐらいに固まってくる。戦国時代までは浄土真宗は微々たるものだった。蓮如が出て独立を宣言した。一向宗と呼ばれていたのが自分たちは浄土真宗であるといった。そういう意識は大体そのころ固まり、最終的には江戸期になって、宗教統制される中で本末制度が固定化され、宗派が確定してくる。これらの宗派が鎌倉時代にできたということ自体がフィクションである。

親鸞や道元の著作も、中世では読まれていない。『歎異抄』がよく取り上げられ、親鸞の思想は悪人正機が代表とされるが、『歎異抄』は唯円の書いたものであり、親鸞の言ったことと矛盾がある。悪人正機も親鸞の考え方と違う。蓮如が禁書にしたこともあって、当時ほとんど読まれていない。明治以後読まれるようになったのは、清沢満之が紹介してからである。ヨーロッパからトルストイの懺悔録などが入り、罪や悪といった問題が取り入れられるようになり、倉田百三の『出家とその弟子』が書かれ、読まれるようになった。曹洞宗の『正法眼蔵』も、中世には読まれず、秘密の書扱いで普通には読めないものとなっていた。江戸時代には出版されたものの、宗門の中で研究する一部の人の読むものだった。大正になって和辻哲郎が『沙門道元』を書いて着目され、一般で読まれるようになったのは大正から昭和に入ってからである。『正法眼蔵随聞記』は学徒出陣の学生が一番良く持ってきた本だった。

鎌倉仏教の代表といわれる著作は中世には読まれていなかった。では中世とはどういう時代だったか。そういう著作によっては代表されない。今日、中世の仏教をどうみたらよいか、親鸞や道元の読みなおしも必要な状況である。

曹洞宗は14世紀位に、関東から東北にかけて広がった。東北で顕著なのは、中世の半ばくらいに、天台宗から変わったのが多い。道元の座禅の教えが採用されたのではなく、曹洞宗は中世半ばから、

密教的要素を取り入れて、小田原の天狗とか東京の巢鴨のとげぬき地蔵とか、土着的宗教を採用していく。天台密教のやり方は複雑だったが、民衆化された仏教として曹洞宗が取り入れられた。今考える合理化近代化されたような教えではなくて、土着的なものに根ざしている。

これらを総体的にどうとらえるか、そして近代の仏教史の中でどのようにこれらが問題になったのか。

鎌倉新仏教中心論は戦後長い間、井上光貞、家永三郎らに取り上げた。今日一般に普及しているのもそのためである。旧仏教は改革もおこったが克服される保守的仏教であるという位置づけだった。親鸞・道元・日蓮を三巨頭として扱うことが確定したのも、ひとつは家永三郎の『中世仏教思想史研究』による。井上光貞『日本浄土教成立史』もそうである。家永は親鸞が最高と、はっきりした価値評価を与えている。そして悪人正機こそ最高の思想であるという、そういう図式を作った人である。50年代から60年代はそれぞれの宗派の歴史が盛んに研究され、親鸞から一向一揆などの流れが研究されたが、基本にあるのは新しい仏教が主流となり古い仏教を駆逐したという見方であり、新仏教を研究すれば中世の実態が明らかになると考えられた。しかし70年代になってそれは大間違いであるとわかった。75年、大阪大学の黒田俊夫が出した顕密体制論では、南都六宗と天台真言の既成の八宗が、広大な荘園主であり政治経済的にも大きな力を持ち権門の一角を構成していたとする。巨大な勢力をもつ顕密仏教こそが中世仏教の主流である。これは、これまでの見方を180度ひっくり返す考え方である。黒田ははじめマルクス主義に基づいて理論構築していたが、50歳代になってから書いたもので、唯物史観の単純な議論では説明できないとして打ち出したものが顕密体制論で、単なる宗教史ではなく権門つまり当時の大きな政治経済的勢力の一角として、政治的経済的に大きな力をもつという当時の総合的な状況の中から、仏教の位置づけをしたところに特徴がある。権門によって、摂関期から鎌倉期までくらの範囲で、中世はどういう時代かということまで見直し、中世をさかのぼらせた理論の一角である。

熱狂的に支持された理論だが、今日では批判もある。従来のかくり方では、新仏教があり旧仏教があるという対立構図だった。ある意味では呼び名の違いなのだが、顕密仏教が主流派で新仏教は異端派とする。どちらの勢力が大きかったかという問題ではなく、内容はどうかということになると、黒田説はやや過渡的といえる。黒田のシンパシーは異端派にあり、少数派こそ優れていると考える。内容は優れているが勢力は弱かったという考えである。

今我々が考えているのは、顕密に対する異端派という考え方ではなく、中世仏教はもっとトータルなものともみならずということである。学説的に今までが間違いで新しいのが出てきたという単純なものではなく、生まれてきた時代背景がある。70年代半ばというのは研究者側の大きな過渡期であり、時代状況がかかわっていたということが考えられる。新仏教中心論は、近代主義的進歩主義的な立場に立っている。明治以来の近代的合理的解釈において、宗教改革と比べられる。体制派に対して民衆の支持で新体制が打ち勝ったという、マルクス主義的唯物史観も含めて、近代的進歩的な考え方であって、中世にもこんなに進んだ思想があったという、中世の中に近代をみる中世の見直しであった。明治30年代にはじめて日本仏教史が生まれている。それ以前はそれぞれ自分の宗派の宗派史だった。そのころは仏教界も、自分たちの祖師が新しい思想をもっていたのだと売りだした。近代の社会に対応しようという欲求に対応して、近代的な解釈がなされた。新仏教を宗教改革と比べるのは大正くらいになされている。原始キリスト教に近いというような理論もあるが、新仏教の近代性を強調しようと

する中で、非常に顕著なのは密教否定である。密教は呪術的迷信的で否定されなければならない。新仏教は、呪術を否定した合理的な宗教だ。60、70年代に空海研究はほとんどなかった。80年代に情勢は変わってくるまでは、密教的な要素の否定と、もう一つ神仏習合の否定がされる。これらが前近代性を表しているとされた。しかし神仏習合の再評価も90年代になってなされている。それは単なる既存の宗教のミックスではないと認識されるようになっていく。

顕密体制論も新しい歴史観の中から生まれたものである。安保闘争や全共闘の敗北で、楽観的な進歩主義史観も見直された。黒田の顕密体制論は、異端派としての新仏教がおさえこまれて少数派にとどまらざるを得なかったという悲観的な見方の反映だった。中世史を現代史とパラレルでみていた。今はその先で、それを過渡期としてとらえなおしたときにどうなるかということである。

少数派への共感というような価値観は別として、顕密体制論をきっかけに中世仏教研究は大きく進展するようになった。1970年代までほとんど研究されなかった膨大な聖教の地道な調査研究が進み、多様で豊かな内容を含むことが明らかにされていった。文書が中心だったが聖教を研究するようになった。東大の史料編纂所で見えたら本文がなく表紙と最後しかない。70～80年代くらいまでは中身はいらなくていつ誰が何をしたかが分かればよいという考え方だった。しかし今は、わけのわからないような内容もすべて、悉皆調査をしないとだめだと考える。お寺の倉庫はそのままそっくり、タイムカプセルであって、総合的にみることによってわかってくるのだという考え方に90年代になって変わってくる。中世の寺院は巨大な文化センターであった。仏教学だけでなく歴史学からの研究も分野を横断し、協力して研究することが重要である。聖教の大部分は、密教の伝授の書付や儀式の仕方などの断片的なものが大部分を占めている。実際読んでもわけのわからないものも多いのでつまらないと無視されていたが、全部見直してみるといろいろなものがある。最近注目されたものでは、中世の神道が密教的儀式を通じて伝えられてきていることや、極端な場合は天皇の即位する時の即位儀礼が仏教の古式を使っている。王権の中心に宗教的なものが入りこんでいることなどが分かってくる。即位灌頂ではダキニ神が中核に置かれている。今日では稲荷と一体化しているもともと密教の神で、墓場で人の魂を食べるといふ鬼神である。このように中世の仏教圏はトータルなもので、一方は権力とかかわり他方では民衆の生活の中に入るといふ大きな構造を持っている。これまでの新仏教の見方の中ではわからなかった要素である。どう位置付けるかは、まだ過渡期であると言わざるを得ないが、否定的に見られていた顕密は豊かでいろいろな内容を持っていて、近代的なものとは全く違った発想がある。近代化の行き詰まりの中でどう読み直していくかということである。

これらの関係は、中核と周縁というとらえ方がふさわしい。鎌倉以後の南北朝期には顕密仏教の優位性が失われる。院政期には中核を占めていたことは間違いなく、新しい仏教は異端的なものだが、キリスト教の異端のように徹底的に壊滅させられるようなことは、日本にはない。日蓮弾圧もキリシタン弾圧のようなことはなかった。異端という誤解を招く。平安中期ころまでは顕密が仏教全体をさした。平安後半くらいになると周縁に新しい運動が生まれてくる。顕密に吸収されるものもあれば離れていくものもあり、やがて自立化していく。禅も顕密と密接だったものが新しいものとなっていく。鎌倉期には禅律は大きな勢力だったが室町中ごろには消えてしまう。

思想の問題として、倫理として、親鸞・日蓮・道元といったものと違うどういうものがありえるかということ、可能性はいろいろある。たとえば無住がいる。彼は新仏教の一行専修とは全く逆の立場で、『沙石集』を書いた。要するに何でもやってみようということ、最初は密教、次いで律、禅をやっ

て、天台の勉強をやって浄土と、いろいろ実践した。晩年は禅の方で、禅密一致という考え方だった。従来の方だと不純なものだが、鎌倉時代にはこれが一般的だった。いろいろやってみて、自分に適したものをやればいいのかという。これはいい考え方だ。新仏教は排他的になる。ほかの行を否定する。神様を拜んではいけない。これが一番正しいという原理主義だ。無住のほうが合理的である。従来否定されていたような見方を見直していく。夢窓疎石も純粹禅から見ると不純だ。いままでの新仏教は価値的にみても一番良かったのか、違う見方があるのではないかという見直しがあるのではないか。

(記録・文責 和田倫明)

## 平成20年度 第三回研究例会

1. 日 時 平成21年2月12日(木) 午後1時より午後5時30分まで

2. 会 場 東京都立板橋高等学校

3. 内 容

(1) 公開授業(13:20~14:10) 1年3組「現代社会」

「国際化と異文化理解」

東京都立板橋高校 渡辺安則先生

(2) 公開授業についての研究協議(14:20~14:50)

(3) 講演I(15:00~16:10)

「都倫研の思い出一人と事業」

会社役員 井上 勝先生

(4) 講演II(16:20~17:30)

「意味の探究—都倫研から学び考えたこと—」

東京都立白鷗高校 葦名次夫先生

### 【公開授業について】

今は「国際化」が進んでいると言われ、それにもなって自分たちとは異なる文化をもつ人びととその生活を理解することの重要性が語られています。しかし実際には他国の文化や人びとの生活文化を理解し、共存することはなかなか難しいものです。ただ「境界を越える」のではなく、そこで「ともに生きる」ことの意味を考えることを中心に組み立ててみたいと思います。(渡辺)

## 都倫研の思い出一人と事業一

井上 勝

都倫研の思い出ということで、教えを受けた先生方、事務局のことなどをお話したい。ずっと勤めていれば定年の年だが、10年前に退職している。佐良土先生から葦名先生がご勇退なのだが一人では講演をうんと言っていただけない。ぜひ一緒にやってほしいと言われ、お引き受けした。葦名先生こそが都倫研、全倫研の中興の祖と理解している。その前座のつもりでお話をする。

葦名先生に最初にお目にかかったのは昭和60年4月である。都倫研の事務局長は二年任期だが、蛭田先生が一年で指導主事になったので、次長一年で事務局長になられた。その最初の研究例会で、会場校を引き受けてくれないかと連絡があったときが最初かと思う。普段通りの授業でよければとお引き受けした。6月21日、八王子東高校の「倫理」の授業だった。当時は「現代社会」はやらないと都教委に届け出て、よいとされていた。必修の「倫理」をやった。イエスの二つの律法を取り上げ、「他者との関係を考えるキリスト教」というテーマでご案内した。研究発表が辻勇一郎先生で、講演が市川浩先生の身体論だった。

八王子東では外へ出ていく先生がまったくいなかった。外部の研究会の公開授業は初めてで、職員会議で報告した。その時に教頭から何をやるのかと聞かれた。教頭先生は最後の海軍兵学校の生徒で奥様がクリスチャン、それで宗教とのかかわりが深まったという方だった。何を種本にするのかと聞かれたので、ブルトマンを使うと言ったら、高校生にブルトマンねえ、と言われた。終わってからの質疑であまり意見が出ず、最後にあるクリスチャンの先生から、何をやっているのか全く分からないという評価を受けた。キリスト教の授業をしているつもりはなく、すれちがったのかと思った。翌日、その授業を受けたものみの塔の優秀な生徒がやってきた。輸血拒否が報道された時期である。正面から意見を述べるような生徒である。意を決したような感じで、先生の昨日の授業は完璧でした、しかしひとつだけ不満があるという。完璧で聖書の通りだが、信仰を持つものの上にも迫害するものの上にもというのは正しいと思うが、それを認めてしまうと迫害されながら信仰を持つ自分の心がくじけてしまうという。自分がどう答えたか覚えていないが、授業は宗教を扱うことができない、倫理の問題だからと逃げを打ったように思う。イエスのアガペーに対して二つの律法があり、なぜ二つの愛を返さなければならないのか。一番信頼している人間が一番先に裏切り、あてにしていない者が助けてくれる。そういう人間関係の現実を扱いたかった。

この例会を引き受けて以来、葦名先生と親しくいろいろ教えていただいた。学生時代の共通体験も多く、お話を聞くとほっとする。葦名先生は教員になってすぐ参加されたが、私は遅くて、昭和58年の総会の時に初めて行った。49年に教員になったので10年間無縁な期間があった。それは学校がすごく面白く、外へ出ていく必要がなかったからだ。

新採の年、初任研に一回出て「倫理・社会」の授業を見たら、生徒は全然聞いておらず、先生もぼそぼそしゃべって一時間が過ぎていく。商業高校だったので、よほど工夫しないと聞いてもくれない。指導主事からどうかと聞かれて、うちでは全く成立しないという言い方をしたら、すまなさそうに、

力になれそうもないが困ったことがあったら相談してくれと言われた。

商業高校は当時は定年も必異動もなく、昭和4年からずっとお勤めの先生が二人、昭和8年、16年という人もいて、昭和4年の英語の先生が、吹奏楽で八王子の駅頭で出征兵士を送ったり戦死者を迎えたりしたとか、旅順工科大学出身の先生が、酒が入ると満州はいいよ、夕日がでっかいからとか、そういう話をされた。多士済々だった。校長から、この先生の授業の進め方はすごいとか、板書がすごいとかプリントがすごいとか教えられ、それで工夫を見せてもらったり教えてもらったりした。この先生の掃除の指導はすごい、というその先生のクラスの前の廊下だけはピカピカだった。指導の違いでこんなに違うのかと思った。学校群が始まってしばらくしてから、都立高校の凋落が始まり、農業、工業と来て商業に来た。学校のペスタロッチといわれていた先生が、もういいよと言い出した。それまでの指導方法を模索しても答えがない時代になった。それぞれの先生が苦慮される中で、いろいろなことを教えてもらった。朝早く来てお茶を入れてくれる先生にも、放課後の部活後、残っている五、六人の先生方と話しているときにも、いろいろ教えられた。

勉強の習慣がなくてノートをとるのがむずかしい生徒たちに、ノートをどうとるか熱心に指導した。黒板に書いて全部書き終わるまで待つ。チョークの色を変えながら説明して書きこんでいく。重要なところは線を引く。まず写すことに専念させ、続いて話を聞きながら黒板に書いたことをプラスし、できればそのあとで黒板に書かれないことでも重要だと思ったら書き込めと指導した。倫社、政経と持ち上がるので、二年間でかなりきれいなノートが出来上がるようになった。宝だから子供に見せるよと言って卒業した生徒もいた。スポーツもやったことはなかったが、引き受け手のないサッカーの顧問をやらされた。生徒がニヤニヤしていた。最初は出てくるけど二日目出てきた先生は誰もいないよと言われた。三日目からは何も言われなくなった。それ以後は生徒に教えてもらいながら、熱意を入れてやった。生徒が教室とは違った姿を見せ、勉強になった。

四年間商業にいて八王子東に移り、新設校の生徒会に取り組んだ。問題をどうやって解決するかという時に、「倫理・社会」でやったことが生きた。生徒会長が十分以上考えて、先生、すべてが悪いというのはすべてがよいという、倫理で習ったことと同じですね、と言う。授業と直結したことをできるという幸せな時期だったと言える。新聞を作る部署で原紙を切るという作業をさせ、捨てるはずの輪転機を生徒会室に置いた。さて文章を書くにはどうしたらよいかと、自分たちで勉強会をやる言い出した。どういう本がよいかというので清水幾太郎や丸山真男を薦めた。古本屋で見つけた山びこ学校の佐藤藤三郎の本を渡したら、回し読みをしていた。生徒会を一番評価してくれたのは事務室の人で、これだけきれいに道具を使うならいくら貸してもいいよと言ってくれた。教員はなかなかそういうところを見ない。校則を変えるところで板挟みになった時は、ニーチェ『善悪の彼岸』や『道徳の系譜』を読んだ。

昭和56年から「現代社会」が始まった。生徒の実態から「現代社会」はいらない、「倫理」と「政治・経済」で行くと届け、都教委はそれでよいが教科書だけ買わせてくれとのことだった。しかし校内ではそれで受験は大丈夫かという。研修に出ているときに、「倫理」が選択に回されてしまった。57年に担任二年目で、母親から生徒が登校拒否になったと連絡があった。家庭内暴力がひどく父親が帰宅できないほどになった。一年半、三年に進級させ卒業までこぎつけた。かなり無理を言ったので、それなりに築いてきた財産を失った。生徒のためにやったことなのに、そんな言い方しなくてもと思うこともあった。それで都倫研とスクールカウンセラーの研修に行こうと、学校を出るようになった。教

育相談の研修で中学の先生が、生徒指導のためならあらゆるメンツを捨ててきたよと言われ、救われた気持ちになった。生徒をなんとか卒業させた昭和59年の総会以来、都倫研に積極的に参加するようになった。分科会の世話人の引き受け手がなかなか決まらず、手をあげたら辻先生が続いた。研究部が和田先生で、年に何回か四谷商業に行った。新人の宮澤先生が赤い車でさっそうとみえたり、藤田ナツ子先生もいらっしやった。辻先生は心理学がご専門で、ユングやライヒを勉強されていた。商業の時に書道の先生がライヒを研究していて、性格分析が役に立った思いがあり、中央線の終電まで辻先生と話し込んだ。60年に葦名先生が事務局長になられた。それ以前のことは知らないのだが、大きな転換期だったと思う。それを一身に荷っていたのが葦名先生と次長の工藤先生だった。「倫理・社会」中心から「現代社会」への転換と、指導の困難な生徒が増えてどうしたらよいかという問題意識で、分科会の内容もアカデミックなものから、関心を向けさせる教材をどうしたらよいかというようものになっていった。また、生徒指導が大変になり、分科会活動にも参加できない状況となり、3つの分科会が年度当初に発足するが、秋頃には統合せざるを得ない状況が生じた。会場校探しが大変になり、秋の全倫研大会を上野高校にやっと引き受けてもらったということもあった。分科会に集まる先生にも、選択科目になった「倫理」を持ったことがない、受けたことがないという先生が増えてきた。新設校の若い先生が、生徒をどうしてよいかわからないという問題意識を持って集まる。それを一身に受け止めて事務局長をされていた。研究内容も授業にすぐに役立つというものに変わる状況にあった。酒井先生が指導部から新宿高校の校長になられ会長を引き受けていただいた。それまで会長と事務局長が一年ずつ重なっていたが、このとき両方一年目ということになった。分科会の会場探しが大変だったが、新宿高校の朝陽会館が使えるようになった。酒井先生は、分科会のある時はいつも校長室にずっと残っておられ、新宿の飲み屋で続きをやった。60年の紀要に酒井先生がその様子を書かれている。葦名先生によると酒井先生は感情の入った文章は一切書かない方なのでこれは異例だということである。「都倫研の分科会の開会は午後6時である。といっても、この時間に間に合う人は2、3名である。6時半くらいまでに5、6名が集まって勉強が始まる。7時半くらいになっても駆けつける人もいて大体10人前後の参加となる。チューターは数枚から時には十数枚に及ぶプリントを用意して熱心に発表し、それをめぐって活発な話し合いが9時過ぎまで続く。」あるとき会館の申し込みがうまくつながらず、校長室でやろうよということになった。宮崎宏一先生や紺野義継先生が常連だった。酒井先生が会の存亡にかかわること以外はすべて事務局に任せるという方針で、葦名先生はそれに従って都倫研の方向転換をされたと思う。酒席で葦名先生が酒井先生にいろいろ事務局で勝手なことをやっているがいいんですかと迫ったが、酒井先生はいつものように泰然とにこやかに、それで何か不都合はあるのかな、ないんならいいんじゃないのとおっしゃって、笑って終わった。一同はこれで大丈夫だ、信頼されているんだと安心した。目に焼き付いている一場面である。

都倫研のこの伝統は、初代会長の矢谷先生の姿勢に負うところが大きいのではないかと。会長はシャッポだから、頭は事務局だよと、ずっとおっしゃっていた。矢谷先生との出会いは、厳しく叱られたことから始まる。62年の6月、小松川高校での研究例会で司会をしたときに、研究発表の先生が急に来られなくなり、講演まで三十分くらい間が空いてしまった。そばにいた矢谷先生に急にお話をお願いしたところ、しっかりしなさいと厳しく言われた。翌日お詫びの手紙をお送りしたら、大変だが会の存続に頑張ってもらいたいという、事務局をねぎらう丁寧なお返事をいただいた。先生は健康上も肺の片方が機能しないという状態で、例会に出るのもままならなかったが、出席されなかった折に報告をお

送りすると、毎回お返事のはがきをいただいた。二、三十枚のはがきが手元にある。

平成3年が都倫研三十周年で、富塚先生がまとめ役となり豊島高校で座談会を開いた。矢谷先生と佐藤勲先生、小川、中村、増田先生が出席され、創設の経緯が語られた。もともと都社研一つでスタートし、歴史と地理が独立した。都倫研が独立しようとしたら、一分科会でよいではないかと言われていた。独立を認めようといったのが都歴研の成田先生である。予算配分でもめたときも、都歴研の風間先生が、会長段階で決めたことだからと支持してくれたおかげで、都倫研が独立できた。神代高校定時制の教頭をしていたとき、原口幸男先生が校長でお見えになり、全歴研の会長をされていた。独立の恩義を感じていたので、私は平成7年と8年、全歴研の事務局長を引き受けた。5月末の全国校長会で引き継ぎが済んでからと思っていたら、5月初めに矢谷先生が亡くなり、報告の機会を失ってしまったのが残念な思いである。

矢谷先生からはがんばってくださいというお話がいつもはがきに書かれていたのだが、二つ程指摘を受けたことがあった。ひとつは、都倫研は最後に独立したので研究活動の内容で勝負するのだという基本的な考え方である。つまらないミスをして他団体からケチをつけられないようにと、手厳しくいわれた。はがきの内容にもよく目を通されていて、文書の通し番号まで確認をされていた。もうひとつは、財政が厳しいのを御厨先生からお聞きになっていたようで、退職の際に永久会費として十数万円程集めたらどうかと言われた。五年十年とためていけば百万、二百万になり、万が一の時にはしのげるのではないかというお考えだった。一部の先生になんとかぼかして聞いたが、どうしたものかよくわからず、退職金からの十万円というものがどういうものか想像もつかず、そのままに終わった。これも心に引っかかっている思い出である。

昭和63年の研究部長、平成元年と2年に事務局次長だった。次長が都倫研担当だったので、この時期がいちばん深くかかわった。会の特徴を生かしていくには、お互いが本当に勉強できる会にと、中身で勝負することだと考えた。上島次郎が『日本近代の精神構造』の中で、日本の明治以降の学問、特に社会科学は、ヨーロッパの輸入版で、日本の社会について内面的に考える学問を別に作らなければならないのではないかと言い、そういう学者として柳田国男と丸山真男を挙げている。柳田は情報を組織化し、丸山は問題を組織化した。しかし、この二つがうまく結合しなかったという。分科会の組織をしっかりとするにはどうしたらよいのか、組織をしっかりとすればつぶれないのではないかと考えた。そこで、学校を出にくい、行きたくても出席できないという先生に、研究部だよりを作った。前回の分科会で話されたこと、次の発表ではこういうことをやりますという予告を詳しく載せた。分科会の延べ参加人数は、60年が160人、61年は200人と記録があるが、延べなので実数は40に届かなかったのではないか。会長、元会長などを含めて60人くらいか。かなり活発だったと思う。

御厨先生は非常に厳格で回転の早い人だと思った。酒井先生の次に会長になられたが、白鷗高校で最初の打ち合わせをしたときに、自分の務めは財政の確立だな、とおっしゃった。どこがどうしてこうなったかわからないが、財政的には苦勞しなくなった。若造どもが勝手なことをいっても、冗談を良く理解してくれた。研究部だよりに「年末大忘年会を開きます」と書いたら、「年末大忘年会に出席できず残念です」と書かれ、会費が同封されていた。

個人的な問題意識であるが、60年代には予備校思想家、塾思想家として小田実や小浜逸郎などが話題になった。なぜ学校の先生にそういうものが出ないのか。たとえば、全国調査を発展させられないか。福武書店の平川さんと知り合い、進研模試やベネッセに発展するとき、岡山大学の先生と研究

機関を設けようとしていて、データをもらえば再分析するという話があった。これも数名の方に相談したが、積極的な反応が受け取れず断念したが、未練があったので、水谷先生に聞いたらエクセルで多変量解析ができるのではないかというお話もあって、数学の先生に相談したが理解できなくてそのままになった。もうひとつ、三宅先生が授業に役立つ文献紹介という企画をされた。文献を共有できないかと考えて広く呼び掛けたが、3名しか出なかった。八王子東で独自の社会科を作ろうという話が持ち上がったときにも、7人の社会科教員に3年間でぜひ読ませたい資料を作ろうとやったときに一つも原稿が集まらなかった。幸田先生が玉川聖学院では社会科の教員で共同研究をしていると聞いていたが、公立高校の教員の壁は厚いと感じた。秋元先生が提案した、試験問題の持ちよりもできなかった。本を読んで討論することからさらに一步進むことができないかと考えていたが、結局何も手がつかずに終わってしまった。

昭和59年から平成2年までの十年足らずの間で思い起こすことを、取り留めなくお話した。教頭になってからほとんど出席せず10年前に学校を離れてしまったが、一人の国民なり都民としてみると、大変だろうなと思う一方で、先生方からの積極的な発言、意思表示があってもいいのかなと思う。学者やマスコミの井戸端会議のような発言ばかりが目立っているが、先生方のきちんとした発言があれば、国民の目も変わってくるのではないか。学校を離れると、誰に会っても教員に対する評価は非常に高い。ある人が、大工の仕事は十年たてば絶対にわかるが、先生の仕事、人を育てるというのは二十年たっても三十年たってもわからないだろう、そこが難しいところだから軽々によい悪いは判断できないよな、と言った。これが一般的な国民のまなざしなのではないか。マスコミとはかなり違うだろう。そのためにも積極的に発信していくことがあってもよいのではないか。どういう形式を取ったら可能かは分からないが、一国民としてはそういうものがあつた方がありがたいと思う。

(記録・文責 和田倫明)

## 意味の探究—都倫研から学び考えたこと—

東京都立白鷗高等学校 葦名次夫

これまで大きな病気を二回した。死を見つめる、という倫理の原点に近い所において、命の輝きを感じている。10年前に心臓の手術を受けた。当時先進的なカテーテル手術を受けることができた。これで教師が続けられると思った。心臓が一日に何回、一生に何十億回と絶え間なく動いているということをしみじみと感じた。中学高校から体調を崩し、ほとんど病院通いとか、一学期間休んだりとか、そういう生活だった。大学は社会学出身だが、個人的には宗教と人生が変わらぬテーマであり、それは倫理においても大きなテーマである。

2003年にはクモ膜下出血で倒れた。救急車で運ばれ、手術は成功したのに、突然、肺が自己免疫不全になった。気管切開で人工呼吸を行い人工栄養で3週間、集中治療室で過ごした。2週間ほどで意識が戻ったときは、熱と痛みと動いてはいけないという、ただこの痛みを何とかしてくれという状況だった。

私の卒論は主知主義の否定だった。倫理は知性によって真理や意味を探求するが、いつまで生きていられるかという人間には、もっと大事なことがあるというのが青春時代の思いだった。永遠のまなざしの中で生きたい。永遠はキリスト教、仏教の中にあるが、私のように悟っていない人間が、人生を真剣に考える機会を与えられて倫理の教師になり、37年間まったく同じ問題意識で定年を迎えている。

なぜ倫理をやるのか。それは先生方への問いであり、私への問いである。誰が倫理の教師ですと言えるのか、人間いかに生きるべきかと伝えるものであるとすれば、そんな自信があるのか。

神が正しいとすれば倫理は相対化される。正義は最も危ないものである。感情を狂わせ世界をおかしくする。正義を超える原理は何かということ考えた。大学紛争のすさまじい世界の中で、臆病で体の弱かった人間は、どう生きるかと、3年間授業がない中で実存的にならざるをえなかった。この世の秩序、しくみ、制度は、紛争や病の経験から、常にかりそめのものであると思っていた。

くも膜下出血の後のリハビリを受けていて、看護師に、肩が戦闘状態でこわばっている、力を抜きなさい、と言われた。力を抜くのは難しい。息をはきなさいと丹田を教えられた。生徒に頑張れとか努力せよとか何かいいことがあるとかいうだけでなく、二つのまなざしが必要である。元気で頑張るものを相対化するまなざし。私は老子や荘子が好きである。自分にブレーキをかけてくれる。なるようになるさ、天然自然、レットイットビー、ケセラセラ。アニメ『となりの山田くん』はスタジオジブリの最高傑作だと思う。結婚式のスピーチの紙を忘れてアドリブをする話がある。諦めが肝心と言ってケセラセラを歌ってしまう。

私には死を見つめざるをえない二つの経験があった。一つは父ががんで亡くなったときで、半年間付き添った。もう一つは兄が突然亡くなったときである。身近な者をなくすことは、人生を変えらると思う。何かが違う、これではいけないと考える。どうしても語りたいたいというのがなければ授業は成り立たないというのが昔からの思いである。それが主観的で独善的であるのは怖いことである。独善

と狂気の中の、誤りの人生と世界と歴史をどうやって学ぶか。「政治・経済」では、心がこもっていない内容の授業は一切しない。いまでは許されないかもしれないが、まともに指導要領通りやった人は誰もいなかった。都倫研・全倫研から学んだことはそのことだ。要領よくまとまったことではなく、このことを語らなければ死ねないという叫びが心を打つ。生徒とともに共有する時間を、墓場のようにしたくない。いろいろな子がいるので簡単には言えないが、授業の場でお互いに腑に落ちるものがほしい。それが身近なものを亡くしたところから来る思いである。

葦名家は会津若松の出で、曾祖父は戊辰戦争の時、仙台藩の重臣、奥羽列藩同盟の画策者で、独立の呼びかけをし、政治犯罪人として一年間の蟄居処分を受けた。そこで曾祖父は南画の書と絵でその思いを表した。その二男が祖父である。小学校教師だったが、父親の絵を見て日本画をやりたいと決心、妻子を連れて上京し、弟子入りして絵を習い始め、94歳まで生きた。年金が出る一年前に上京していて、情熱とはそういうものである。その祖父に反抗した父も、当時の上野高校で級長をするほどだったが、絵を描きたくなり、勤当されながら芸大に通った。美に魅入られた家系である。自分にもそういうものがあるのかなと思っていた。葦名はちょっと変わっているというところがアイデンティティである。全倫研・都倫研の事務局を嬉々としてやっているように見えたかもしれないが、見抜いている友人には、葦名は肌合合わない嫌いなことを一所懸命やっていると言われた。ただ嫌ではなかった。酒井先生にすべて任されて、二十代、三十代の事務局が自由にやっている研究会など、全国でも例がない。一所懸命支えたが、根本的には自分の中でこつこつと職人的に深めていって、何かお役に立てばという気持ちだった。何十人、何百人の講演や授業を聞いてきたが、お話を伺うということはその方の人生をいただくことであり、怖いことだと思う。

お話したいことは、人生は縁である、ということに尽きる。近代の主体性が問われても、自分はなじまなかった。学ぶものは実践せよという実践コンプレックスもあった。観察者であることの引け目をずっと感じてきた。友人の半分は退学し、半分は傷ついてそれぞれの人生を歩んで行った。自分は平凡に教師になった。その思いがずっと続いている。パスカルのパンセを傍らに抱えていた。ドストエフスキーの『貧しき人々』をはじめて読んだときには、人生で一回だけ山手線を三周して読んだ。何か人生が変わった気がした。キリスト教の心貧しき人々というのは、言葉で説明されてもダメなのだが、あるときメッセージが伝わってくるものかもしれない。西田幾多郎がまさに悲哀と苦悩なしに哲学は成り立たないと言っているが、その独自性は挫折と悲嘆と苦悩と困難と困窮の中にしかないというのが私の思いだった、当時話題になった『愛と死を見つめて』には全く感動しなかったが、塩瀬信子の『生命ある日に』という、もういつまで生きられるかわからないが高校大学時代一所懸命生きたいと、切々とつづられた文章は傍らにあった。憧憬という言葉が好きで、エロスの根底にあるものも憧憬がしっくりする。尊敬する先生が愛する娘さんを亡くされて、この子は憧憬の一念で生きてきたと書かれた。何かを求めて生きるという、その何かとは何なのか。この世界で満たされない何ものかとは何なのか。

大学時代3年間は紛争で、憧憬の念を学問で満たしたいが、何もない。そこで、家も近いのでうわさをきいては東大や立教の、有名な教授から百人、二百人と講義を聞き、その中から五人、六人を選んで聞いた。京極純一も聞いた。人生の問いをいやしてくれる先生がいた。増谷文雄は、内容は難しくても切々と説く言葉の響きがあった。授業は誰がとか何をとかではなく、語るリズムの中に命がある。若い時の直観的なものは大事なのではないか。折原浩先生には複雑な気持ちがある。

情熱的にウェーバーを論じ、造反教官として屈折した人生を歩まれた。外山滋比古先生とお話しして、ウェーバーに『職業としての学問』があるが、君は女房には「飢えても本は買うものだ」とちゃんとやったかとおっしゃった。学者はすごいと思った。洒落な講義は素晴らしかった。教育実習も実存的なものを取り上げた。自我のエゴイズムが問題となった。キリスト教にとっても漱石にとっても、自我の苦しみ、我執の苦しみ、自意識の苦しみ、自意識の呪縛を、どう越えるかという、難しい観念的な問題があった。教員になってからは、アランの幸福論に従って考えないで生きていて、幸福に元気に暮らしてきたが、その時には切実なテーマだった。

紛争の中で六ヶ月、鬱鬱になり、その回復期に実習だった。教育大の付属高校はエリート中のエリートたちで、実習生はいじめられると聞いていたので、つぶされないためにもと、波多野精一の宗教哲学を、『歎異抄』を素材に扱った。卒業論文も実存的になった。

形式合理化が進んで教育の心が忘れられていると工藤先生もおっしゃる。今の教育の世界が、なぜこうなんだという気持ちがぬぐえない。精神のない専門人、心情のない享樂人のニヒリズムをいかに克服するか、マージナルマンであるがゆえになんとか見えるものはないかという、これが37年間のキーワードである。矛盾と対立と緊張と葛藤のはざまの中で耐えるということがウェーバーのありかたである。信仰にすぐに入る人ではなく、信仰に学問的対象的客観的に近づき、学問の客観性を克服しながら信仰の内実の世界をも明らかにしようとする。到底両立しえない矛盾した世界を探究するからこそ、宗教社会学はすごいものと思う。

都倫研・全倫研の創設にかかわった方々と、偶然にも高校、大学で面識があって知っている。不思議な縁である。矢谷先生がまさにその時の校長先生。人格高潔、師はこうあるべきだという方だった。丸山先生の授業は素晴らしかった。世界史の先生は、これではだめだという授業をしていた。発表学習をさせるのだがやる気がない。発表学習はよほどの根性こめないとだめだと知った。弟が増田先生の授業を受けた。在学中に全倫研・都倫研が発足した。大学時代は教科調査官として「倫理・社会」を発足させた齊藤先生が指導教官だった。命の面では非常に「運」に恵まれた。まずだめだったものがこうやって生かされている。そしてこういう「縁」に恵まれた。

72年に誘われて、総会に出た。会場はずっと赤城教育会館で、歩いて5分のところというのも縁だった。最初着任した定時制高校では、自己の傷をいやしながら社会に復帰していく四年間を過ごした。市ヶ谷商定時制は、准看護婦と自衛隊員の高校だった。命の瀬戸際で生きて、ほとんど寝ないで学校に来ている准看護婦さんに、どんな話ができるのか。北海道のサバイバル訓練に行く自衛隊員に聞くと、原生林に一月さまよって、危ないと思うと引き上げられるのだと言う。いったい私は何なのだ。観念的にものごとを探究して、自縄自縛に陥っていたのを、アランではないが現実の世界で現実の日々の課題をともに克服していく中で回復していった気がする。今でもこのときの生徒だけは一人一人覚えている。貧しい時代に行く場のない生徒たちと、休日に一緒に山やスキーに誘った。今だったら懲戒だが、当時は皆そうだった。都倫研・全倫研で出会う先生方は皆、形にとらわれずそれぞれ自分で積極的に生徒たちとかかわってきた。この間に先生方とお会いすることで倫理と人間と教育と、それを信頼することを学ばせてもらった。紛争の中のマキャベッリの、韓非子的な、人を信頼すると破滅するというような世界から、そうではない世界があるということを知った。

一方で、海野先生に声を掛けられて、上野高校や小石川高校で授業をした。都立高校のトップで早稲田慶応は滑り止めという時代に、新人教員が放り込まれ、教育実習のときの怖れがよみがえった。

私より優秀で問題意識がある生徒たちが、教科書は読めばわかるからつまらない、もっとおもしろくてためになる、深い学問的なことを話してくれという。再び、昼間いろいろな大学に行って、いろいろな先生の授業を受けた。明日の授業で何を語るか必死に学ぶので、非常によく学べる。語ることで学べるという痛切な経験である。学問的な内容を深く学ばないと、平明には語れない。

定時制の子たちは、この現実の人生を必死に生きている。偏差値ではわからない真実、心に響くメッセージが、命をかけている彼らにある。もし聞いてくれなかったら内容が空疎だということである。授業は拘束するものではないと思っていた。ガリ版を毎日10枚も切っていた。当時は、原典をしっかりと読めばよいと思っていたし、それが流行ってもいた。とにかく原典をとことん読んで、あとは共に学んだ。今でも私は授業とは真理がこちらにありそれを伝えるのではなく共に学ぶものだと思う。自分が教師だというとらわれを、何か人生経験がないと打破できない。今、中高一貫校にいて昔を思い出した。優秀な子どもたちで冗談やユーモアが伝わり、無駄なことを喜ぶ。模範的な授業が生徒の心に残るのかは分からない。

10時間分の授業があれば、それを1時間に圧縮すればよい授業ができる。その余裕を若い先生にも与えてほしい。自分で一所懸命学んだことを自分の言葉で語るということが、都倫研・全倫研から学んだことで、その自由が命である。都倫研・全倫研の先生方はそういうものを持っていて、そこからにじみ出るものが心を打つ。生徒が憧憬の念を持つ環境を作らないと、教育は成り立たないのではないか。

キリスト教の公開授業で2年目に研究発表したときの都倫研紀要の文章がある。「自らの生に確信薄きものが、偉大な思想を論じることの戸惑いの問題である。信仰なきものが宗教を、安住した小市民がマルクス主義を、不安・懐疑なく満ち足り埋没しているものがソクラテスや実存主義を論じ、ぎこちなくこわばってベルグソンを語ることは、アイロニー的な矛盾である。」キルケゴールとソクラテスのアイロニーそのものの人間が、どうやって授業できるのか。一つの道は緊張と葛藤と矛盾であり、老荘の反語と逆説の中にしか真理と真実は示されない。「確信なくも、困惑し、迷い、緊張と葛藤故に切実に意味を希求するといったマージナルマン的な生き方」、これが卒論のテーマだったが、それで行くしかないのかと考えた。

試験とは何なのか。教育界の制度仕組みを根本から疑う。答えが一つで○つけて終わりとはなんなのか。戸惑わせ、ハッとさせ、にこにこ考えさせる○×式を考えた。○×式はだめとよく言われるが、○か×かわからない文章でそれをやった。

その後いろいろな仕事をいただいて、注文される方の期待にこたえるおとなしい文章を書いてきたが、常に違うのではないかという気持ちがあった。授業はメッセージを含まなければならないという考え方だが、しかしこれがまた怖かった。狂信と独断で狂っていく学園紛争の中で、いかに人間は正気を保てるか。一面的に私が熱を込めて語ることは偏っているのではないか。これを克服するためには、対立した意見をそのまま紹介することである。違う教科書を二種類使った。歴史はヒストリー、つまりストーリーである。篤姫や新撰組が取り上げられると、薩長史観はおかしいのではないか、テロリストではないかとなってくる。根本的に歴史がヒストリーなら学問もそれ以上にストーリーである。偏っているかもしれないと思えば、対立した意見を紹介するという授業で、訓練をしてきた。

私は、亡くなった者の思いを胸に抱いて生きることが倫理の原点と思う。中学の先生は特攻の生き残り、敬愛する先生はガダルカナルの生き残り、ほとんどの先生は極限状況を生き、見たものを決

して家族にも語れず胸にしまいながら生きてこられた。その思いが消えたときが危ないと思っている。せめてそれらの先生方を通して得たものを、私の使命として伝えようと思う。20年前から、南京から靖国から日中戦争から、あらゆるビデオ教材をすべて集め、自分で編集している。

教育は公正な場であるべきだということは守らなければいけない。大学紛争の中の括弧つきの「狂気」とイデオロギーについて、上島次郎先生の授業を聞いたときに、なぜこんなおかしい世界があるのかと質問したら、イデオロギーとは酒に酔った状態なんだよ、と答えられた。それで腑に落ちた。あんなに酒に酔った時にはカッコよかった学者、知識人も、しらふになるとみじめにおかしくなる。

・・・ということを行った人がいます、というのが二番目のテクニックである。教科書的な文章をいかに書くか。資本主義が悪である、と書くとはねられるが、レーニンにかくかくの時代にかくかくと分析したと書くと通る。ファクトと伝聞の違いである。それはマスコミなどあらゆる世界の不文律である。しかし私たちにはオピニオンがある。「板橋高校は南極の真ん中にある」というのは括弧つきのファクト、「事実」である。なぜなら、手続きをへて間違っていることが分かるからである。このことを教えるのがとても重要で、その訓練として、戦後の問題を授業の最後に扱う。死者のまなざしということ、柳田国男の先祖の話、日本の祭り、やはり民俗学の見方をしない限り、靖国もいろいろな問題も扱えないだろう。ウェーバー的な見方でいけば、中国や韓国の人々とも理解しあえると、希望を持って生徒に語っている。歴史観が違うのは当たり前である。そこをどう近づいていくかである。

あらゆるテレビドラマや映画などの感動の根源は愛と死である。フランクフルトを基に卒論を書いたが、死と愛が倫理の命である。愛とは恋愛ではなく他者を大切にすることである。他在はものだが、他者はかけがえがなく自分を変える。宗教哲学とは、絶対他者によって自己が変わることである。私にとっては恋愛でも何でもすべての原体験のように思う。キルケゴールの実存の三段階から、すべてその実存の基本にある。カントもヘーゲルもすべてキリスト教、ユダヤ教の根本的な、他者の問題こそが最大の問題ではないかと思う。他者の鎮魂と癒し、梅原猛のいう怨霊、そういうものが近代では消えた。80年代以降の時代に、教育には何ができるのか。このインターネット時代にも、リアルなフェイストゥフェイスの、人格から学ぶ問い、人格から漂い味わえる空気のような教育、その空気は感じているのではないか。自分の中高時代は一学期間休学したり午後は休んだり、進級も危ぶまれながら先生方が通してくださった。不登校やいろいろなことで来られない子は私自身である。生徒はそれを感じるらしい。しかしそういう生徒に感情移入すると自分も鬱になる。井上先生にも言われたが、とにかくカウンセリングはいい加減にやると怖い。病気は専門医に任せて、自分は徹底的に付き合うしかない。全倫研・都倫研の縁と運で何というすばらしい世代に生きたことか。今の生徒に申し訳ないと思う。若い人が希望と輝きを持って生きてもらいたい。そのために都倫研・全倫研の事務局を支えていただいたあの時期は奇跡に近い状況だったのかもしれない。二十代三十代がやらせていただき、酒井先生はじめピンチになると助けてくださる。教育とはピンチの時に助けるものだ。自分でも葛藤を抱えていたので、倫理を愛しながら社会科学の魂をもった人間、また都倫研・全倫研の創立期が分かる人間からすると、「現代社会の中で倫理を考える」とか「倫理的なものを生かす」というのは、その先生方を裏切ってしまったのではないか、倫理的内容がおかしくなるのではないかと思う。倫理的内容は原典でぎゅうぎゅう行くしかないものもある。

ニヒリズムや鬱に陥って模索した時に出会った、看護師や自衛隊の生徒、厳しく叱咤激励する小石川、上野の生徒、都倫研・全倫研の先生方によって、人間への信頼を学びながら、裏切られることなく幸福に来られたというのは、縁と運、永遠のまなざしの何物かを感じる。(記録・文責 和田倫明)

## 分科会報告

### 第一分科会

- (1) 第一回：4月22日 会場：都立荒川商業高校 発表者：小橋一久先生（元都立高校講師）  
内容：「生存権・社会権の学習」 生活保護をテーマに、憲法の生存権・社会権の学習について発表した。
- (2) 第二回：7月8日 会場：都立荒川商業高校 発表者：小賀野勝芳先生（江戸川・定）  
内容：「聴覚教材の活用について」 世界の著名な政治家について、残された音声資料を基に、その活用方法を発表した。
- (3) 第三回：9月9日 会場：都立荒川商業高校 発表者：多田統一先生（荒川商・定）  
内容：「社会情報について」 東京大学社会情報研究資料センターの展示資料を中心に、新聞、雑誌などの社会情報の扱いについて発表した。
- (4) 第四回：12月9日 会場：都立荒川商業高校 発表者：多田統一先生（荒川商・定）  
内容：「公民科教員に対するアンケート調査の結果から」 教員の意識調査の結果を発表した。

### 夏季合同分科会

平成19年8月23日（木） 会場 お茶の水女子大学附属高校

〈実践報告ならびに研究発表〉

- (1) 「教育実習生の指導について—地理A、世界史A、現代社会—」  
都立荒川商業高校（定） 多田統一先生  
元都立高校講師 小橋一久先生
- (2) 「地球温暖化を考える現代社会の授業」  
お茶の水女子大学附属高校 村野光則先生
- (3) 「論理的思考力を伸ばす」  
都立福生高校 本間恒男先生
- (4) 「カントの思想」

### 冬季合同分科会

平成19年12月26日（水） 会場 国士舘大学

〈実践報告ならびに研究発表〉

- (1) 「研究所めぐりと公民科教育」  
都立荒川商業高校（定） 多田統一先生
- (2) 「脱アイデンティティ—エリクソンからミード、そしてフーコーへ—」  
都立立川高校 菅野功治先生
- (3) 「大学学部課程における哲学・倫理学教育と高等学校における『倫理』との連携について」  
国士舘大学 木阪貴行先生

# 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会規約

1. (名称) この会は、東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会といたします。
  2. (目的) この会は会員相互によって、高等学校公民科「倫理」「現代社会」「政治・経済」教育を振興することを目的とします。
  3. (事業) この会は、次の事業を行います。
    - (1) 「倫理」「現代社会」「政治・経済」教育の内容および方法などの研究
    - (2) 研究報告、会報、名簿などの発行
    - (3) その他、この会の目的を達成するために必要な事業
  4. (事務局) この会の事務局は原則として会長在任校におきます。
  5. (会員) この会の会員は次の通りです。
    - (1) 個人会員 学校または教育研究機関等に所属して、この会の目的に賛成し、会の事業に参加する個人
    - (2) 機関会員 この会の目的に賛成し、会の活動を援助する学校または教育研究機関等
    - (3) 賛助会員 この会の目的に賛成し、会の活動を援助する団体または個人
  6. (顧問) この会に顧問をおくことができます。
  7. (役員) この会の役員発議の通りです。任期は1年ですが、留任は認めます。
    - (1) 会長 (1名)
    - (2) 副会長 (若干名)
    - (3) 常任幹事 (若干名)
    - (4) 幹事 (若干名)
    - (5) 会計監査 (若干名)
  8. (総会) 総会は毎年6月に会長が招集し、次のことを行います。
    - (1) 役員を選任
    - (2) 決算の承認、予算の議決
    - (3) その他重要事項の審議
  9. (年度) この会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月31日に終わります。
  10. (経費) この会の活動に必要な経費は、会費その他の収入でまかないます。  
会費は次の通りです。
    - (1) 個人会員・機関会員 年額2,000円
    - (2) 賛助会員 年額1口2,000円機関会員および賛助会員団体に所属する個人は、個人会員と同様に会の事業に参加できます。
  11. (細則) この会の規約を施行するについて、幹事会は必要な細則をつくることができます。
  12. (規約の変更) この会の規約は、総会の議決によります。
- 附記1. この規約は昭和37年11月20日から施行します。
2. 昭和42年度総会で、会計年度と会費の変更が認められた。
  3. 昭和55年度総会で、本研究会の名称を「倫理社会」研究会から倫理・社会研究会に変更することが認められた。
  4. 平成5年度総会で、会費の変更が認められた。
  5. この規約の名称、目的、事業の一部が平成6年度総会で改正され、平成7年度4月1日より施行します。
  6. 平成16年度総会で、会員ならびに会費の変更が認められた。

## 事務局だより

今年度の秋の例会では、東大の末木文美士先生に「鎌倉仏教の新しい見方」というテーマでご講演いただいた。末木先生のご講演は、私たちに鎌倉仏教のとらえ方の大転換を促すたいへん貴重な講演だった。

高校倫理における日本仏教は、奈良仏教（南都六宗）→平安仏教（天台宗・真言宗）→鎌倉新仏教（法然・親鸞・道元・栄西・日蓮など）という枠組みが一般的であり、私もこれまで教科書どおりに日本の仏教思想を教えてきた。しかし近年の研究で、鎌倉時代においても南都六宗と天台宗・真言宗が主流であったことが明らかになっている。鎌倉期の仏教の呼び方も、旧仏教、新仏教というものから「顕密仏教」「改革派」「異端派」という呼び方にかわってきている。また、「戦国仏教」という概念も生まれてきている。末木先生は、『日本宗教史』（岩波新書）をはじめ、『鎌倉仏教形成論』（法蔵館）『鎌倉仏教展開論』（トランスビュー）などの著作で、こうした鎌倉期から戦国期の仏教の思想と民衆の状況を詳しく解き明かされている。

高校「倫理」においては、西洋思想、中国思想、宗教思想、日本思想、青年心理まで広くカバーしなければならないため、最先端の研究動向まで勉強する時間はほとんどない。近年は聖徳太子が実在したかどうかも疑われている。デカルトやヘーゲルの位置づけもかわっているのかもしれない。そうしたことはやはり専門家に教えを乞うしかない。その点、都倫研では第一線で活躍する研究者を講師として招き、レクチャーを受けることができる。今回の末木先生のご講演も、私たちにとってとても有益なご講演だった。

これからも、都倫研ではさまざまな分野の専門家をお招きし、最新の研究成果を授業に取り入れていきたいと思う。それと同時に会員相互の交流を通して、授業内容・方法の向上に努めていきたいと思う。

（都倫研事務局長 お茶の水女子大学附属高校 村野光則）

## 編集後記

紀要の担当となってから、毎年、発行の遅れでご迷惑をおかけしてばかりでした。皆様に深くお詫び申し上げます。次年度からは担当を外れますが、どうか積極的な投稿をいただけますよう、これまで以上によりしくお願い申し上げます。

年度末に、長年お世話になった井上先生、葦名先生のご講演をうかがって、先達の皆様から受け継いだこの研究会を、どのようにして盛り立てていったらよいか、身の引き締まる思いがしました。教員になってすぐ、右も左もわからないうちに総会に出たところ、当時事務局長だった細谷斉先生に、終了後の事務局の飲み会に誘われて以来のお付き合いで、足が遠のいた時期もあったものの、20代、30代で事務局の末席を務めさせていただきました。学校のほうも荒れていた時期の商業高校でしたが、こういう研究会があるのだからとぜひ行ってくるようにと言われたものでした。管理職も先輩も、若手がいろいろな知識経験を広げていくことを、大いに励ましてくれたものです。そんな恩義を受けながら、なんの進歩もないままに、すでに私も50代に入ってしまった。本来ならこの研究会も若手に任せて、どっしりと後方支援に回るところですが、まだまだ小間使いから足が洗えそうにないのは私の不徳の致すところですが、これからの研究会の道筋をどうつけていけばよいのか、途方に暮れてばかりですが、引き続きよろしくようお願い申し上げます。

なお、紀要に関するお問い合わせは、mwada@gakushikai.jp へお願いします。

(広報部長 産業技術高等専門学校荒川キャンパス 和田倫明)

平成21年10月31日発行

発行者 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会

著作者 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会

代表 立石武則

事務局 お茶の水女子大学附属高等学校内 村野光則

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

電話 03(5978)5856 ファックス 03(5978)5858

URL <http://www.torinken.org/>